

資料
集成

近代日本語〈形成と翻訳〉

全 18 卷
別巻 1

全巻収録内容

川戸道昭

中央大学教授

榊原貴教

編著

近代日本語が
形成される「現場」が
ここにある。

「近代日本語は翻訳との遭遇によって
その核心部分が形成されてきた。」

江戸から洋語受容期を経て
明治を駆け抜ける膨大な
資料群の深い森に分け入り
漢文―訳語―和文の現場で
〈近代日本語〉が
《翻訳》との格闘によって
醸成・創造される過程を
“見せる”

近代日本語の〈成立〉とは、
〈言文一致〉とは、なんだったのか？

根本を問う画期的業績！

原典〈復刻編集〉資料集

学術資料出版
大空社出版

刊行のことば

編者

口語文と文語文の乖離を指摘し、日本語の改良を初めて政府に提言したのは、前島密であった。提言は徳川慶喜への建議書のかたちを取って上申し、その方法を国文教育の改善に求め、学制の改革に托そうとしたことは、今日残されている『国字国文改良建議書』によって明白である。その後の日本語改良運動の流れは前例にならい、明治政府に働きかけ、教育の啓蒙活動により、言文一致運動の成果獲得へと邁進していく。これらは、前島密が改良の目的を、自らの知的営為の源泉であった漢字を「支那字の頑毒」と批判して、国字改良を「國家富強を爲すの礎地御坐候」と述べたように、社会形成の一環として推し進められてきた。すなわち、近代日本語の形成は、近代国民国家を招来してきた啓蒙思想の一翼を担う、「上からの民主化」として行なわれてきた。

日本の近代文学もまた、啓蒙思想の普及の過程から発生してきた。読本、仮名草子からの脱却が始まったのは、西洋文学との遭遇による。しかし、文学界は明治十年代末の欧化熱反動Ⅱ国粹運動の渦中にも、西欧文学の心酔者たちは国粹化と西欧化の狭間に身を裂かれながら、表現の場で暗中模索を始めた。社会的には富国強兵の体制に与しながらも、内面的には西欧が生み出した近代リアリズムとその表現方法の日本語化を求めて苦闘する。

日本語改良主義者たちは、言文一致運動の名の下に、ことばの表現の安易化を求め続けたのに対し、美妙、二葉亭、嵯峨のや、紅葉、思軒、魯庵という西欧文学に魅惑された文学者たちは、思想表現としての言語の緻密化に挑戦し始める。その闘いの成果は、明治二十年代の東京で一挙に開花していくことになる。いったん挫折した日本語改良主義者の啓蒙運動は、文学者の成果の礎の上で、明治三十年代の国家の強権化と共に再開され、国定教科書の中で成就されていく。本集成は、このような歴史認識の下で、表現者としての翻訳家に主軸を置き、そのバック・グラウンドとして従来の近代語形成資料（「言文一致の鬼」といわれた山本正秀先生の研究に多く依拠する）を再点検し、編者なりの考えに基づき編集した。考えの基本は、近代日本語は翻訳との遭遇によってその核心部分が形成されてきたとの確信による。本資料集成が、今後の近代日本語研究の基本資料として活用されることを願うものである。

二〇一四年一月

編集方針・概要と構成

《翻訳》から見せる近代日本

① 本集成は【文体編】【史料編】の二部構成とする。

【文体編】（第2～8巻）

山田美妙、二葉亭四迷、嵯峨のや、尾崎紅葉、また内田魯庵、森田思軒、若松賤子ら文学者の実作品を「初出」新聞雑誌掲載の形で復刻、合わせて本人および他者による回想・批評・コラム・広告等の関連文献をまとめ、言文一致の表現創造過程を時代を追って原物で確認できる資料集とする。さらに美妙・四迷・おむろ・紅葉の各々作品年表は、「初出」データを年月日まで明らかにしてまとめた詳細書誌年表である。

【史料編】（第9～18巻）

日本語・翻訳論の対象となる文献を可能な限り広範囲な領域から蒐集する。分類は「近代日本語形成資料」「刊本・新聞雑誌に大別」、演説・記事論説関係、さらに、明治期・大正期の学問・言論・教育界の多数の論者による国語・言語・文章論集成とする。また江戸期の和文語学書・漢詩注釈書から明治初頭の英文典を含み、《和・漢・外》を統合した従来になく視点から近代日本語の形成過程の実態を捉える資料となるようにした。

② 別巻『欧米文学の翻訳と近代文章語の形成』漢文対応の日本語から欧文対応の日本語へは本集成の「道案内」となる。

総合論考に資料・年表・図録を加え、多領域の研究者・識者に益する内容とした。

③ 第1巻は本集成の「道しるべ」となる。全巻の「総目次」「総索引」とし、テーマによって分散化している収載資料を検索できるツールとした。

「近代日本語は翻訳との遭遇によって
その核心部分が形成されてきた。」

四半世紀を超えて近代日本の《翻訳》という営為を〈原典史料〉で総覧してきた編者の目を選択した基本文献を集成！

研究に必要な〈素材〉が一堂に会す有難さ！

これだけの〈原典史料〉を探し集めるだけでも、どれほど膨大な時間と労力が必要か！

全巻構成 (全5回配本+別巻)

〈各巻分売可〉*必要な巻をお求めいただけます。(価格表は最終ページに)

第1回配本 第1巻+【文体編】(第2〜4巻)

第1巻 総目次+総索引 (第2〜18巻統合索引)

第2巻 挑戦する文体・山田美妙集

第3巻 懐疑する文体・二葉亭四迷集

第4巻 理想の文体・嵯峨のやむる集

第2回配本 【文体編】(第5〜8巻)

第5巻 苦渋する文体・尾崎紅葉集①

第6巻 苦渋する文体・尾崎紅葉集②

第7巻 言文一致作品集①

第8巻 言文一致作品集②

原作：ポー、ホフマン、ディケンズ、アンデルセン、ゾラ他
訳者：饗庭篁村、森鷗外、若松賤子、内田魯庵、森田思軒他

第3回配本 【史料編】(第9〜13巻)

第9巻 近代日本語形成資料(刊本の部) 江戸期

あゆみ抄(安永2)、唐詩選解(天明4)

第10巻 近代日本語形成資料(刊本の部) 明治期①

格賢勃斯英文典直訳(明治3)、ピネラ氏英文典直訳(明治3)

第11巻 近代日本語形成資料(刊本の部) 明治期②

国字国文改良建議書(前島密)、民権自由論(植木枝盛) 他

第12巻 近代日本語形成資料(刊本の部) 明治期③

ことばの写真法(丸山平次郎)、日本新字発明(小島一騰) 他

第13巻 近代日本語形成資料(刊本の部) 明治期④

言文一致(物集高見)、言文一致(言文一致研究会) 他

第4回配本 【史料編】(第14〜16巻)

第14巻 近代日本語形成資料(新聞雑誌の部) ①

計90件収録

第15巻 近代日本語形成資料(新聞雑誌の部) ②

計104件収録

第16巻 演説・記事論説集

計63件収録

第5回配本 【史料編】(第17・18巻)

第17巻 国語改良異見

計70件収録

第18巻 現代名家文章大観

計166件収録

別巻 欧米文学の翻訳と近代文章語の形成

漢文対応の日本語から欧文対応の日本語へ

別巻

川戸道昭 著

欧米文学の翻訳と近代文章語の形成

漢文対応の日本語から欧文対応の日本語へ

必読・必携！ 本資料集と関連研究への総合的「道案内」

史料を見る、原点に立ち返る、論が始まる。

従来の研究においては…本来ならば欧米の言語・作品との対比の中で考察していかねければならない新たな文学・文章の成立過程を、それを抜きにして考察する傾向が見られた。そのために、いつまでたっても、二葉亭の「だ調、美妙の「です」調、紅葉の「である」調」というような正鵠を射ない皮相な解釈から抜け出せないで来た。従来の研究にみられるそうした歪みや欠陥を正すため、本書においては、もう一度原点に立ち返って、モデルとされた欧米の言語・文学との対比を基本に、日本に新たな文章・文学が形成されていく過程を詳しくたどり直してみることとする。すなわち、欧米文学・欧米言語との対比を通して近代文学・近代文章語の形成ということが本書の主要テーマということになる。(はしがき)より

〈目次抄〉 口絵(図録)近代日本語形成史「カラー16頁」

【第一部】 欧文の直訳に基づく日本語の初期化と再構成(約160頁)

序章 新文章語創造運動の本質

I 『緊思談』の出現 初期翻訳文学三区分/周密文体/日本語(初期化)

II 周密文体から言文一致へ 「あひまき」と『夜と朝』/思軒の翻訳は旧文体か/「言文一致」とは何か

III 新文章語創造運動の本質―「能く人に通じる直訳文体」の創造 「あひまき」も「クラウド」も本質は新文体/「翻訳」はすべて「創作」―新文章語形成運動の原点

【第二部】 文末辞からたどる近代文章語の形成(約110頁)

序章 欧文との比較から見えてくるもの 文末辞は欧文動詞の口語訳に関わる問題

I 新文章語のはじまり―外国語教育における「である」文の普及

II 文学界における展開―常体文章語としての「である」文の成立 従来のアプローチ

「ちへの疑問/美妙」である文の出発点/四迷「である」文の基礎の確立/言文一致の停滞

期「逍遙の呼びかけ」内田魯庵「である」文の展開/尾崎紅葉「である」文の完成と普及

III 翻訳から創作へ―自由間接話法の発見とその展開 思軒「牢籠」(「語り手」と「登場人物」の視点の一体化/紅葉は日本のフロベール? 「である」文の創造の意義

【付録】 若松賤子と「小公子」―児童文学の翻訳と新文体の形成 読者・批評家の目に

映じた賤子の新文体/母が兄に「言い聞かせる」物語

【史料集】 藤田茂吉・尾崎庸夫「緊思談例言」(明治18年)ほか

本文中に引用された文献の復刻(13点約120頁)

【年表】 日本近代文体史(常体編)

【年表】 日本近代文体史(常体編)

【年表】 日本近代文体史(常体編)

【年表】 日本近代文体史(常体編)

【年表】 日本近代文体史(常体編)

B5判・上製・クロス装・310頁・カラー口絵16頁
978-4-283-01188-5 本体20,000円+税

(2014年12月刊)

第1巻 総目次・総索引

9月20日……………⑬ 65

ほととぎす一派の写生文

写生文に就いての工夫 二葉亭四迷 文章世界 明治40年3月

15日……………③ 379

翻訳

国語改良異見 木村鷹太郎 『国語改良異見』 明治33年5月15

日……………⑬ 206

翻訳直訳体

過去廿年間の文章の変遷 XYZ 文章世界 明治40年6月15

日……………⑬ 271

翻訳の文章

『罪と罰』(巻之二) (ドストエフスキー作) 内田魯庵訳 内田

芳兵衛 明治26年2月25日……………⑦ 565

翻訳病

小説病 水魚仙 女学雑誌 明治23年3月10日……………⑭ 314

ま

『舞姫』(森鷗外)

明治文章変遷史 鳩節子 文章世界 明治39年11月20日……………⑮ 182

●第2巻内容(抄)

嘲戒小説天狗(我楽多文庫明治19・11～20・7)

花の茨、茨の花―骨ハ独逸肉ハ美妙(我楽多文庫ほか明治20・6～21・8)

風琴調一節(以良都女明治20・7～9)

ふくさづゝみ(以良都女明治20・10～21・2)

武蔵野(読売新聞他明治20・11～21・8)

言文一致論概略(学海之指針明治21・2～3)

空行く月(以良都女明治21・3～22・1)

正本はむれツと―城門幽霊出現の場合(シエークスピア作 以良都女明治21・5～9)

情詩人(我楽多文庫明治21・5～11)

日本俗語文法論の内(学海之指針明治22・1)

胡蝶(国民之友明治22・1)

『枕の草紙』の文章

名文章と苦心の痕跡 関根正直 『現代名家文章大観』 大正5

年9月20日……………⑬ 122

真砂町時代の交遊

二葉亭の事 坪内逍遙 『柿の蒂』 昭和8年7月5日……………③ 435

「ます」「ました」

国語改良異見 石川倉次 『国語改良異見』 明治33年5月15日

「ます」「で御座ります」 調談話体

『民権自由論二編甲号』 植木枝盛 明治15年2月……………⑪ 461

『マダム・ローラン伝』

二葉亭の事 坪内逍遙 『柿の蒂』 昭和8年7月5日……………③ 435

『団々珍聞』

明治大正文庫小史 湖上人 『現代名家文章大観』 大正5年9月20日……………⑬ 543

万葉仮名

国語改良異見 三上参次 『国語改良異見』 明治33年5月15日

『みをつくし』(上田敏)

強くなりたがる猫の話(女学雑誌明治22・1)

言文一致小言(文明治22・4)

あるのん物語(ライヴス作 女学雑誌明治22・5)

紅葉山人のやまと昭君細評(以良都女明治22・9)

女子用文章独学び(以良都女明治22・11～12)

普通語「ある」の意味(以良都女明治22・12)

文章符号の解釈(以良都女明治22・12)

文と語調との関係(以良都女明治22・12～23・1)

日本韻文について学者が工夫すべき簡案

(以良都女明治23・1)

吾々の言文一致体(しがらみ草紙明治23・5)

言文一致体を学ぶ心得(以良都女明治23・6)

文学小言(しがらみ草紙明治24・3)

言文一致の犠牲(文章世界明治40・10)

第1巻「総目次・総索引」は

全18巻への「道しるべ」

分散する膨大な資料から、書名・タイトルに隠れた主題・キーワードを検索できるように工夫された研究に至便な索引！

●第1巻内容

総目次

総索引(第2～18巻統合索引)

①執筆者索引(付生没年・主要著作)

②人名索引

③書名・作品名索引

④事項索引

「事項索引」より

*項目は、書名・記事名からでは推測しにくい〈内容〉を採った重要キーワード索引。しかも、索引語彙の指示ページに留めず、出典となる執筆者・書名・記事名・発表年月日を併記した〈使える〉索引です。

【第2巻の巻頭を飾る資料】

嘲戒小説天狗 第一回

美妙齋主人 著

聞ゆるの出鱈目の讀方で大膽ふもテムベストに讀む聲ハイルノーニ
 コロルド メスセンゲル……ワイフワ オーファー ジュ：ジュ：ジュ
 ビテール(“Hail, Many Coloured Messenger…… Wife of Jupiter”)あゝどう
 も古いテ賢ふシエークスビーア翁の筆力の凄いとれが……感心れ外に無
 い此テムベストの戯曲あどい三十余種の中でも随分屈指といふ程有て……
 通篇何處とて可笑く無い所無のテを……こいつウ……翻譯でもあ
 て……ナア……一番世中の平凡くた共を吃驚させて遣らうか知らん……
 そきても些可哀そうだ何れシエー先生の豪氣を人だ……と言ふ聲のする
 一室に熱海に宿屋鼻高屋の二階で此大風呂敷を廣げる先生の湯治に來て
 居る自稱才子年々まど三十ふ奈良漬の香の物號をば意外と榮漬は澤庵押
 が利いゑ風……鈴でいゝがアラ……と懶ける生きつき月夜に釜を輝味

(本内容見本に掲載の見本頁は下の原寸見本を除き、原則として縮小です。)

*本資料集では、原資料のページ・レイアウトを再現するのに努めています(新聞資料は2段組に統一編集)。

本文体裁 原寸見本

・判型 B5 判 (182 × 257²リ)



圓満にして渾然たる文章の好味か解るともう放せなくなる。英文の方では先づ批評家の説明を讀むで置いて、ミルトンの失樂園に掛かる。バクルの文明史、マコーレーの歴史的論文、其等を讀むで文章の巧拙、筆力の強弱等に就て色々發明もした。

で、文章は無論崇拜してゐた馬琴調に似寄つたものを書いてゐた。然るに此處に私の文章の上に一大革命が起つて來た。それは私が斷然馬琴の文章を捨て、言文一致といふ新しいものに就いた事である。その革命の動機は何であるかといふに、私が西洋の文は言文一致である事に氣付いたことである。も一つは、英國文學史を繙くと、詩人のチヨースラーの肖像が掲げられてゐる。チヨースラーはもと俗文を主張して、今日の英文の基礎を作つた英國文壇の大勳功者、その人の傳記は如何に自分の頭を刺激したであらう! 私は其時から自分も彼の如く俗文を以て文章界に立たうと決心したのである。此時丁度大學教授のチャンパーレン氏か、文明と言文一致とは離る可からざるものだといふ論文を「羅馬字雜誌」に出して、盛に言文一致の必要を絶叫し出した。辰巳小次郎氏なぞ

第3巻 懷疑する文体・二葉亭四迷集

●第3巻内容（抄）

通俗虚無党形氣（近刊予告文）（鍛鉄場主 明治19・5）

浮雲（第一編）第三編19回（金港堂 明治20・6）都の花 22・8）

あいびき（国民之友 明治21・7）

あひさき（改訳）（片恋 明治29・11）

めぐりあひ（都の花 明治21・10）

奇遇（めぐりあひ）改題（片恋 明治29・11）

小説文体意見（文芸倶楽部 明治31・3）

余が言文一致の由来（文章世界 明治39・5）

写生文に就いての工夫（同明治40・3）

私は懷疑派だ（同明治41・2）

『付録』新編浮雲（批評）（以良都女 明治21）／諸家文章短評（田

山花袋 文章世界 明治40・1）／故二葉亭子の性行（坪内逍遙

太陽 明治42・6）／二葉亭君の性情（嵯峨の屋おむる 同）

二葉亭四迷作品年表

故二葉亭子の性行

坪内逍遙君談

長谷川君に關しては、『朝日新聞』其他へ一通り話したので、差し當り珍らしいことも思ひ出さない。然し折角のお尋ねだから、同君の性質に關して、ホンの思ひつくまゝのあらましを話ませう。

君は尾州藩の士族の血統を受けて江戸で生れ、大體に於て江戸ッ子の教養を受けたので、大體の傾向は先づ江戸式と言つてよい。特に其越味性に於て然であつた。それに、漢學塾に居て、嚴格な漢學先生の薫陶を受けたるなども（それが一時君をして激しい反動を起さしめた一原因であつたにも係らず）君をして頗る常識に富ましめ、一時は今の所謂自然主義者風の思想や感情を懷いて居つたに係らず、頗る禮儀正しい、義理堅い人たらしむるに與つて力あつたと思ふ。蓋し君は一面は非常に感情的な人で、其容貌體格には似合はぬ深い温い優しい情を持つて居たと同時に、一面は甚だしく智的で、極めて明透な頭腦の人で、直覺にも推理にも秀で、事に臨むと思慮批判の力が瞬間も休まず働いて、自他を批評するに忙しく、何事に對しても理想が怖ろしく先へ進み、之に副ふべき

405 故二葉亭子の性行 坪内逍遙 太陽 明治42年6月1日



めぐりあひ（第二）

露 ツルゲーチフ 著

二葉亭四迷 譯

都の花の咲きぞめに青葉も花のにぎやかだし、何ぞ一つ書いて見ろといふ情ある方々の仰せにすがつてちよつぱり翻譯の稽古を致しました。此めぐりあひの原名を「トリイ、フストレーチイ」と云つて極めて艶の有る文章が、あか／＼売びた筆でそつと譯し切れません。そこで些とく／＼しいが割註を添へましたからお合せの上おあやしがら御覽の程と願ひませう。

Assai qui colli e vieni allegamenti,
Non ti curar di tanta compagnia —

第一號

十七

めぐりあひ

第一卷

十七

Vieni, pensando a me segretamente —

Chio ti accompagna per tutta la via.

歌の意を圖を越えて君一人來い、他人をさそふに及ばない。道を私の事を思ひつけてゐたら私を道伴にしたやうなものだといふのださうです。

何處へと云つて夏の中「グリーンノエ村へやど」く遊獵に往つた所になかつた、自分の莊園から二十露里計の所に有る（グリーンノエ村へやど）。此村の近傍に之野鳥撃ちには郡中第一とも謂ふ可き場所が澤山有つた。最寄の灌木また野田あどを幾らす獵り盡して、自分いつの日夜をろにあると此邊に之滅多に無いといふ郷の沼へ立寄つて、其處から之を旅宿へ歸る事としてゐた、此旅宿といふ何時も取り付けて、主人と村の差配人信切な男で有つたので。沼から「グリーンノエ」までと道程凡そ二露里計り

私は懷疑派だ

二葉亭四迷



私は筆を執つても一向氣乗りが爲ぬ。どうもくだらなくて仕方がない。「平凡」なんて、あれは試験をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不十分だつたから、試験もとう／＼達しなくつて了つた。充分に達しなかつたといふのは、サタイアになつたからだ。その意ではなかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。

「其面影」の時には生人形を拵へるといふのが自分で付けた註文で、もとい／＼人間を活かさうといふのだから、自然、性格に重きを置いたんだが、今度の「平凡」

と來ちや、人間そのものの、性格なんぞ眼中に無いんさ九ツきり無い譯ではないが、性格はまア第二義に落ち、それ以外に睨んでゐたものがある。一言すれば、それは色々の人が人生に對する態度だ……人間そのものではなくて、人間が人生に對する態度……といふと何だか言葉を弄するやうな嫌ひがあるが、つまり具體的の一箇の人ぢやなくて、ある一種の人が人生に對する態度だ、而してその一種の人とは即ち文學者……必ずしも今の文學者ばかりぢやなく、凡そ人間在つて以來の文學者といふ意味も幾らか含まれたつもりだ。だから今度の作では那樣關係ばかりを眼に見てゐて、人間を活躍させようなんぞといふ氣もなけりや、從つて活躍もしなかつた。これが「其面影」と「平凡」を創

めぐりあひ 二葉亭四迷 都の花 明治21年10月21日 260

●第4巻内容(抄)
薄命のすゞ子(大和錦明治21・12・22・23)
初恋(都の花明治22・1)
くされたまご(同明治22・2)
野末の菊(同明治22・7・10)
小説家の責任(しがらみ草紙明治22・11)
婿えらび(都の花明治23・1)
画とき(国民新聞23・2・3)
母と小児と遇つ時(同明治23・3)
旅人(都の花明治23・10・12)
あぶないもの(同明治25・4・6)
黄八幡(同明治25・11)
けふ此頃(同明治26・1)
露国文学一班(しがらみ草紙明治26・4)
春廻屋主人の周囲(早稲田文学大正14・6)
〈嵯峨のやおむる作品年表〉

音がホンの幽にして居る。計りしは大方街道を馬車が通るのでもあらう世間はシンとして物淋しい草葉の露を命ど鳴く虫の聲も霜枯れて物悲しく姿の哀な七日の月は心細い幽かな光を糸の様に窓に垂れて居る。但見ると紙窓に變な影が朦朧として寫つて居る。……何んであらう歟露の如く煙の如くで善く分らぬ然し形ハント振動した女の髪毛の毛と見え其に折々窓の透りて木の葉の散る様な壁土の落ちる様な幽かな音がサツ／＼とスルト例の影が彼方へ往き此方へ往き窓の上を徘徊する。……怪しい……一陣の冷風がサツ／＼窓を吹き拂つた影は忽焉として消へて残るは白い障紙計り……ハタ不思議な……と見ると又寫つて居る。有るなど見るとふと消へる伏屋にれふる簾木か臘月夜の幽かな影マア果して何者であらう歟右に動く左に動く窓外人あつて家の中と何ふ様である家と言へば此の部屋の間の方から氣味の悪い凹んだ誰やらの兩眼が此怪しい影を見詰て居る。是は一個の娘の目である壁際に薄い四

(薄命のすゞ子 明治21年12月1日)

あがらみ草紙
露国文学一斑
矢崎探美纂譯
歐洲の東北に横はる大東方の平野、今の露西亞帝國に、如何にして文學の種子が蒔れ、如何にして其種子が發はれし歟、之を研究するは無益の事にもあらざるべし。然れども大ベートル以前の文學は寺院の閑室裡に潜伏し有て、まだ社會のものとはならざりき。然も其文學は最も貧しくして之を研究するの價なければ、余は専らベートル以後の文學に就て諸君と共に之を研究せんを欲す。蓋し新露西亞の文學、之を分て四期となす事を得べし。
曰く、第一、改革期の文學
曰く、第二、カラムジン期の文學

(露国文学一斑 明治26年4月25日)

あがらみ草紙 第二巻
文學評論
小説家の責任
北坪散士
人生の説明
社會の批評
凡そ社會上の人にして責任なき者いあらざるなり農夫の田を耕す職人の物を作る、車夫の客を載せて去る、商人の有無を通ずる學者の學問を研究する皆其責任を盡す所以なり、天下の者皆然るなり然らば小説家亦責任なからざるべからず抑其責任は如何なるものや余は不學淺見未だ一冊の文學論も讀まず未だ一冊の審美學も讀まず故に學理的には是を知らざるなり然れども聊か露西亞の大家の小説を讀み一二批評家の論文を讀みて僅に其責任を知る事を得たり今試に左に記して天下の小説家に告げん余の見る所を以すれば
真理の發揮
此三ツ是れ小説家の責任なり余は是を信じて疑はざるものなり是を以の故に余は言はんと欲す小説家とは万策の觀察者なり、真理の研究者なり、真理の感得者なり、人間の研究者なり、人間の感得者なり、人間の先導者なり社會の觀察者なり、社會の感得者なり、社會の改良者なり
と、然らば如何にして小説家は其真理を發揮すべきか曰く情より入つて是を發揮するなり卑近の有形に因つて高遠の無形を發揮するなり、然らば真理とは如何なるものや曰く真理の命力は不生不滅無限無量なり人の命力は有限有量にして生滅あるものなり如何や有限を

(小説家の責任 明治22年11月25日)

曰く、第三、アウレンキン	曰く、第四、最近世期の
是なりとす。然れども茲に	カラムジン期以前の文學、
ものには、好材料のなき事	當なる材料のなき事なり。
れを専らパレウイ氏の露	然もカラムジン以後の文
（學位）アレクセイ、アレ	皆て東京外國語學校に於て
之を記せり。蓋し此文學一	究の材料としては、元より
此文章に據りて、幾分露西亞文學の梗概を明むる事	

明治22年3月31日	『露西亞文學の概観』	大坂・傳書館
明治22年6月	『行策』	國民之友
明治22年7月21日	『野末の菊』	都の花(19号)
明治22年8月4日	『野末の菊』	都の花(20号)
明治22年8月15日	『野末の菊』	都の花(21号)
明治22年9月15日	『野末の菊』	都の花(22号)
明治22年10月6日	『野末の菊』	都の花(23号)
明治22年11月2日	『野末の菊』	都の花(24号)
明治22年11月2日	『野末の菊』	都の花(25号)
明治22年11月25日	『野末の菊』	都の花(26号)
明治22年12月25日	『野末の菊』	都の花(27号)
明治23年1月3日	『野末の菊』	都の花(28号)
明治23年1月23日	『野末の菊』	都の花(29号)
明治23年2月1日	『野末の菊』	都の花(30号)
明治23年2月2日	『野末の菊』	都の花(31号)
明治23年2月3日	『野末の菊』	都の花(32号)
明治23年2月17日	『野末の菊』	都の花(33号)
明治23年2月18日	『野末の菊』	都の花(34号)

〈嵯峨のやおむる作品年表〉より



第5巻 苦渋する文体・尾崎紅葉集①

●第5巻内容

「二人比丘尼色懺悔」作者曰（吉岡書籍店 明治22・4）

恋山賊（ゾラ作文庫 明治22・10）

二人女房（都の花 明治24・8・25・12）

二人女房（改訳）（太陽 明治30・6）

隣的女（読売新聞 明治26・8）

紫（同明治27・1）

青葡萄（同明治28・9）

（二人女房 明治24年8月2日）

＊改訳の跡は訳者の《翻訳》との格闘の様子を、同時に近代日本語の形成過程を見せます。

左の改訳

（明治30年6月15日）

（上之巻）

二人女房

ふりふり

二人女房

紅葉山人

（一）

芝罘月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて、「ぬれて来た文面に濡へし杜若」、と出端のありさうに現はれたる女子二人、いづれも長湯に磨ける顔色のかく、と赤く、對の高島田に髪飾も同じ好み。年長たる方は容貌優れて麗はしく、十九ばかりあり。一人は二歳も年少と見えたるが、女子には厚肉過ぎて色さへ白ならず、額の左に寄て薄れれど三日月狀の創痕あり。美しき方は聲まで清やかに、辯舌爽快にして口數多く、往らぬに愛嬌具はりて人を外さぬといふ性なり。美しうらぬ方は口重く、樂くても浮立たせ、常に物案じ較なる陰性に、年齢よりは更けてかへつて年長の様なり。「鐵ちやん、お前の帯は彼だから可けれど」と舌敵して、「可厭だねえ私のは。衣服が好くつたつて帯が悪けりややッぱり榮やしない。さうか仕様が無いかね」

都の花 第六十四號 二人女房 （一）

文庫第廿七號

（二三）

（十四）

（ハヤッ）

魂さる一聲。笹の枝へ三四十も貫た棒の花を投すて、轉がるやうに木間をくり出し、お政の腰にひしと抱附き。

（来やしないかい）

と聲も體も慄はせば、一同腹を抱えて大笑ひ。主從忘れたのいたづら。此處と目星をつけし處へ来れば、天秤を却して卯平四邊の草を指さし、

（そわれみな旅……）

（さアお嬢様すこしお休み遊ばせ。あ、お爺さん草臥拭をとり出し草の上に敷て、

たねえ）

（足が棒のやうになつちまつた）

どツさり腰を据る時、娘はその肩をついて、

（そら毛虫が……）

（えッ）

と飛びのき、眉間に八の字をよせ、今坐た處を氣味悪さうに見せし、

（何處に）

娘は袂と口に當て笑へば、

（わらお嬢様。覺えて居らつしやいましよ）

お政は煙草管とくはへて、まつちを擦りながら、

（いゝ氣味だ。臆病）

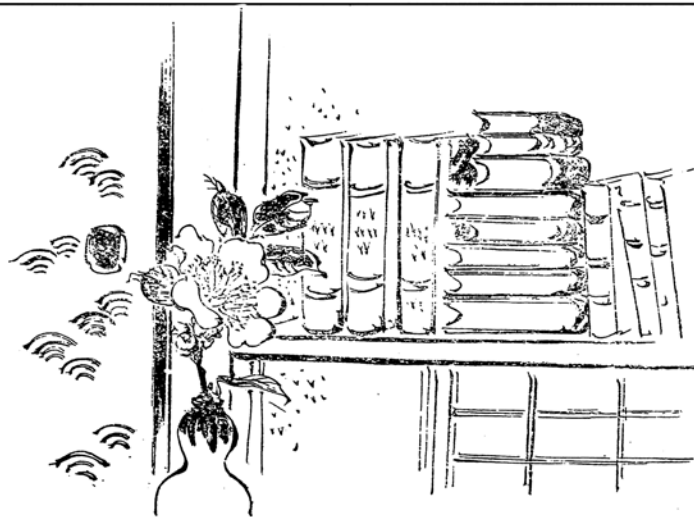
娘はお政の蔭に屈みて、

（兼かにんしておくれもうおどかしッこなしだよ）

此處にやゝしばらく戯れてから旅せり。その村立を引ちぎり引ちぎり……面白き事警へ難し。最初は一かたまりに額を聚め、背を合せ、それより追々くづれ出し

（恋山賊 ゾラ作 明治22年10月18日）

(多情多恨・前 明治29年3月5日)



困り来てた所爲事無しに葉山に麥酒を飲む。
妻は「一肺賑かあのが好きだつたに、創しい森の中
で雨に降られて、唯一人埋まつてるぢやないか。
僕に實に胸が一杯にあつて如何することも出来ん
だつた。而るゝと、姻家の母がね、此花と見付け
て僕に教へたのだ。垣の隅と見ると、此花が唯一
一朵咲いてるのだね、君、其木に唯一一朵あのだよ。
母が言ふに、是は類の魂だ。類の思が遺つて花
にあつて咲いたのだ。類の大好の長襦袢に、山茶
花の模様が着いてゐたから、是は類の魂に違無
い」と言つて泣くのだ。僕も見ると、丁度此方と向
いて此花が咲いてるのだ。僞事と言ふやうだけ
れど、其時、此花が實際類の顔に見えたよ。風が
来て颯くのが、類が藥を飲むの否だと言つてね、
首を掉つたやうだつた。僕に其時、妻が復活つた
のかと想つた。考へて見れば、妻は僕等の世の下
に埋まつてゐるのだ。是は山茶花なのだ。妻の母

●第6卷内容（抄）

多情多恨（前編）（読売新聞明治29・2）
多情多恨（後編）（同明治29・9）

〈付録〉流行言葉（貴女之友明治21・6）／社幹

美妙齋著夏木立（我樂多文庫明治21・9）／恋

山賊を評す（幸田露伴 初時雨 明治22・12）／

二人女房中編細評（学海居士都の花明治25・

8) 言文一致と擬古文(教育公報明治33・

2) 金色友又上中下篇合評(芸文 明治55)

1) / 金色石文 二 一篇合言 (芸文 明治3)

3) / 文火の意義を論じて 上葉氏に及ぶ (後)

8) 文熏の意事を諱して終棄日に及ぶ(後漢書、
卷百八、絶句6) 工葉日への文童

藤宙外新小説明治30・7）／紅葉山人の文章

觀（小鳥新潮明治37・8）／隱形術（紅葉遺

文美江寺43・1)／言文一致の揺籃時代(紅

葉の「読者評判記」(斎藤昌三・早稲田文学昭

和 2.4)

〈尾崎紅葉作品年表〉

(多情多恨・後 明治29年9月13日)

多情多恨
(後篇)

(三) の 贅

紅葉

例より早く退けて柳の脇へ還つて來たが、渠へ出
入どもに何と下へ言葉と掛けるでもなく、下宿屋
の階子と昇降するやうに、そうと出て行つて、ま
うと入つて來て、直に二階の居間へ引籠るのであ
る。お類の居た頃へ、出るにも歸るにも、其姿を
見て何と云はねば氣が濟まぬやうに、搜出して
も一々辨るのであつたが、此に來てから、弗と
那麽事へ無かつて、無挨拶極まるのと、現金か男
だ。と葉山と言つてゐる。お種も潰れて了つて今
格別怪しみもせぬ。柳の助八机の上へ帽子とポー
トフォリオと投出して、上衣と脱がうとする所へ、
婢が昇つて來て、「あの奥様が、お茶がはいりまし
たから入らつてまいまし。」

○二人女房中篇 都の花第七十一號に
起り第八十號に終る 細評 學海居士

桑山人が著を余か初めてみたなりしは我樂苦多文庫といふ雜誌に京人形とて一の撫駭美人を
とす山人は絶世の才子よししてうの艶麗の筆と緻密の情は二筋道梅曆等も三舍と避くへ
舊時の戯作者などいふ輩はさまでの學識もなく俳諧者流よりして風と小説筆とどりし
の標準も無く何の根柢もあらずされは唯人事を經歷して婦人女子を喜んせんとのみうの
いふまでもあらずさかるに近世は學識ある少年講學の暇に筆をとり或は古書を博覽し外
一戯曲まで讀あきらめし人の細心精意を凝らしてつゝるからに凡庸に超出し心理を究むる一
またまた恠むに足らざるなりされどもこゝの一疵は年なほわかき故に經歷に乏しく人情
を究むどして思はず筆走りて猥褻に陥り又小説は道學の書に非ずといふ説臆隨に沁潤して道
論を排斥し思はずしらすして人情に背戾するに至ると是なりこゝをも山人の綴りしお
ひしを余かこれを評し痛く排撃せしとありきそは幽貞の女子を不幸に陥らしめしどろの
入りて小子後生を誤るの恐あるを論せしなりうのち色懣悔夏瘦などの作次第に出てや
悟られしかと覺ぬしかど山人はまた一種の見解ありて我説に従ふにもあらずうの説も
まゝあらず我輩の如き天保老人か一槩に抹倒し難きものありうはまた別に論すへし此二人女
房が排撃する筋はさらに無く二人の女子性情を寫しつゝいて姑の性質頑なるを細かに寫し

都の花
第八十八號
二人女房細評
一

都の花 第八十八號 二人女房細評

1

〈付録〉より (明治25年8月7日)

紅葉遺文

隱形術

抑も自分は言文一致を書かぬ迄は、凡そ天下に文と名くべきものゝ中で、言文一致ほど無責任に易しいものは無からうと念つた。實に後生美文を亡すものは此の言文一致であると信じた。苟も伊呂波四十七文字を諳するものは誰か一篇の小説を作るを難むせむやと考へた。自分をして若し言文一致家であらしめたらば、沈頭に速記者を置いて、毎日五新聞の小説を見事受持つて見せる、と心に期したのである。

文章は書畫である、言文一致は寫真器械である。花鳥の前に畫筆を置いたばかりで絹の上に花鳥は顯はれぬ。風景に對し

〈付録〉より
(明治43年1月1日)

第7巻 言文一致作品集①

●第7巻内容

罪と罰(下) ストエフスキー作、内田魯庵訳

卷之一 (内田芳兵衛明治25・11)

卷之二 (内田芳兵衛明治26・2)

(卷之一 明治25年11月10日)

小説 罪と罰

上篇

第一回

七月上旬或る蒸暑き晩方の事。 S……「ペレウーロク(横町)の五階造りの家の道具附の小坐敷から一少年が突進して、狐疑逡巡の体でK……、橋の方へのツそり出掛けた。首尾よく階子の下口で主婦に出會はなかつたが、此家の主婦は下坐敷に住って臺所が常々月の開いたまゝ階子に對て居るので、いつでも少年が出掛ける時は、餘義なく敵の窺前を通り過ぎ、骨身に染みるほどの恐怖を生じ、意久地なく眉に皺を寄せるが常である、といふは宿料の停滯があるから、それで顔を合はせるが怖ろしいのだ。斯くばかり少年に畏氣が附いたは不幸が重つた故でなく、此頃中依剝

第二十回

『僕ア左うは思はない! 左うは思はん!』と繰返してラズーミヒンは一生懸命にラスコリニコフの最後の言葉を打消さんとした。頼て二人はブリヘーリヤ、アレキサンドロウナとゾーニヤが待切つてゐたばかりの家の近く来た。此對話の最中ラズーミヒンは折々街衢の真中に立つて、ついが是までに話した事のない問題に立入つたので非常に憤激してゐた。『そんなら左う思ふな、君の勝手に』とラスコリニコフは冷かに無頼着に笑つて答へた、『例の通り君はとんど氣が附かなかつたらうが、僕は一言一句に衝をかけてゐた』『君は何んでも疑つてゐるから……だからそんな奥の方に潜んでる事まで見附出すんだ。左う……僕だつてポルフキーリイの調子でどうかど云へば變つてゐる事は承認する。まかし是はあのザミョートフの畜生が

(卷之二 明治26年2月25日)

前卷批評

拜啓。御手紙並に御苦辛の翻譯共に落掌仕候。未だ全巻を讀了不致候得とも初めて古今有數の作に接するを得たるは兄の賜と奉感謝候。いぬる日書生が先ちて一讀致し候ひしかば其大略を物語らせ處々細かに聞取り候折には甚だ感念に感じ直に御翻譯を取りて二章讀過偶來客ありて讀了らず其夜は聞たる處を讀みたる處と必心中に繰返して就寝候ところ其夜不快の夢を見たり即ち小子が最初の感覺は單に不愉快といふ事に止まりて其不愉快の性質は未だ判然せざりしが今日に到りて其不愉快といふ感は所謂 pessimistic feeling なりし事明かなりなりぬ。譬へば total eclipse の中に昨夜の殘燈の明滅したるを認めたる……否な殆んど認め得ざらんとしたるが如き感あり宇宙は dark dark といふが如き感あり。此書第一巻だけを讀みたる處にては人間はげに一種の狂人にあらざれば一種の病人にして罪は病疾也憫むべきものなり惡むべきものにあらずといふ事明著なるが如し弱志の人は之に對して厭世の念起るべく、やゝシツカリしたるものは pity compassion の念を生ずべし其他に何の感起るべきや全巻を精讀せざれば覺る能はず候へども人生の dark side は寫破して餘蘊なき大作たる事兄が賜により正可に知りぬ。其評は更に考へて後早稲田文學紙上に掲げ候べく候。爰に掲げ候は不斗感下候ところのみ。

御翻譯の文章は嘗て國民之友なごて拜見致し候よりは數等の上に位し候と信じ候。憚なく申せば尙ところ々直譯に過ぎたる……即ち Tolst のまづ被破存候箇所も相見え候へども……解らぬなどいふ者は論外の義を存候。必竟是は瑕と致し候ても斯る大作の翻譯には左したるサハリにならぬ事と信じ候萬機拜肩の折に讀る。草々。

十一月二十日。坪内雄藏。不知庵學兒。

御著譯の珍書儘に書肆より送られ既に四五日前一讀仕候。兼て御話に承り候如く深刻精密の着想驚嘆之外無之。如此新味を嘗得し事全く貴兄の御賜物と深く奉謝候。

無評相試み朝日新聞へ出して御一笑を博すべしと筆を執りて更に一讀の後また躊躇仕り、今日まで評も不仕、昨日は理學士○○○氏來訪にて談話其事に及び候處同氏嘗て如く貴著を持去り候につき唯今たは胸を組めてのみ罷在候。其躊躇の次第と申すは貴著一讀の後小生の感には惘然として暗澹たる空室に獨坐するが如く何やら後より人の窺ひ見るが如く一種のビクツキを生じ殆んど主人公の罪と罰を半分引受け候様にて云ふべからざる不快の念を起し申候。是れ全く原著者の覺力貴兄翻譯の妙とは申せ可恐の甚まきものと感服候が、果して讀者に如斯一種不快の感念を起し候事小説の本意に候不識否哉小生等の考へにては極め付けかね候故一旦執りし筆を擱て腕組中に候也。斯る沈痛を極めたるものを失望の境にさまよふ書生など讀み候ては益々世を厭ふ一種の惡念を養成致し候はずやと氣遣申候。元より小説と申すもの動喜惡惡などいふ淺き主義を含むが本意にては無之とは貴兄の御説にも承り成程と存じ候が讀畢つて不快の念を生じ候が強ち本意にもあるまじく小生の如き意思弱者は實に變にビクする氣持に相成り申候。

讀賣新聞附録

第三千八百四十七號
明治二十年十一月三日

西洋怪談 黑猫 (上) 聖庭篁村

私(わたくし)の明日(あした)死ぬ(しぬ)身(み)宵(よ)一夜(ひとよ)の命(いのち)を奪(うば)はれ、望(のぞ)み願(ねが)ひ別(わか)れに
あい只(ただ)心に思(おも)ふ偽(いつはり)も飾(かざ)りもない眞(ま)實(じつ)と今(いま)書(か)き残(のこ)るを
れども決(けつ)して此(こ)事(こと)と世(よ)間(かん)の人(ひと)に信(しん)じて貰(もら)はうといふ
了(しま)簡(かん)でんかい又(また)此(こ)事(こと)と信(しん)じて呉(くれ)れと望(のぞ)むの狂(くる)氣(き)の
沙汰(さた)は、何(なん)故(ゆ)とあれ、此(こ)事(こと)の我(わ)身(み)が信(しん)じられぬは
どの事(こと)も併(ひ)し私(わたくし)の夢(ゆめ)と見て居(ゐ)るのでも發(は)狂(くる)して居(ゐ)る
のでも、ない氣(き)が確(たしか)なればこそ、明日(あした)死(し)といふ今(いま)夜(よ)斯(しか)
うして書(か)くことと出(で)來(き)る其(その)書(か)き残(のこ)る事(こと)柄(がら)の私(わたくし)の一家(いっか)内(うち)
に起(お)こつた事(こと)で、それ(それ)に説(せつ)も評(ひやう)も加(く)へざる有(あ)る儘(まま)に書(か)くだ
け、嗚(な)呼(あ)い今(いま)思(おも)ひ出(で)しても身(み)が縮(ちぢ)み夫(そ)が爲(ため)に怖(おそ)さめ
苦(くる)しきと見て必(かならず)と惱(なや)まし、末(すえ)に終(は)つて斯(しか)うして身(み)と
亡(な)つて至(いた)つた左(ひだり)のうらに斯(しか)うして書(か)き残(のこ)して置(お)くは、
後(のち)の人(ひと)が(私(わたくし)の)やうに氣(き)の噪(さわ)しく、あゝ靜(しず)か人(ひと)が

夫(わ)の斯(しか)うしう道理(だうり)の
夫(わ)の自然(しぜん)の結果(けつが)で有(あ)る
呉(くれ)れるも知(し)れぬ私(わたくし)
わつさゝも子(こ)供(ご)仲(な)間(かん)
より内(うち)に居(ゐ)て小(こ)鳥(とり)で
で両(りやう)親(おや)も其(その)好(この)みと許(ゆる)し
呉(くれ)さる夫(そ)と友(とも)達(だ)遊(あそ)ぶ
其(その)うちで費(つぎ)した大(おほ)人(ひと)
進(すす)み私(わたくし)の樂(たのしみ)と云(い)ふ
飼(か)主(しゅ)の言(こと)と聞(き)き尾(お)を
つ其(その)可(か)愛(あい)さし世(よ)間(かん)の
に背(そむ)く人(ひと)間の友(とも)情(じやう)
私(わたくし)の若(わか)いうち(うち)に妻(つま)
質(しつ)で極(ごく)柔(な)和(わ)で亭(てい)主(しゅ)の
飼(か)ひ養(やしや)つて同(どう)じに樂(たのしみ)
此(こ)時(とき)飼(か)つて有(あ)るの

錄附號四十九百第誌雜學女

に坊(ぼく)の氣(き)高い器(き)量(りやう)に及(およ)ぶ者(もの)は一人(ひとり)もありません、兎(う)に角(かく)坊(ぼく)は
ソツクリ其(その)儘(まま)、わたくしの心(こゝろ)には、あの赤(あか)んぼうよりか、だれよ
りか可(か)愛(あい)くつてならぬのだよ」とおつしやつて、少(すこ)し沈(しん)黙(もく)
て入(い)りやると思(おも)つたら泣(な)出(で)して、「坊(ぼく)は、善(ぜん)き聞(き)こ、先(まづ)にお
なくまりなすつて、遠(とほ)方(かた)の墓(はか)に埋(う)められて入(い)りやる方(かた)に、似
てゐるのだよ、坊(ぼく)も手(て)其(その)方(かた)の通(とほ)りに、續(つづ)大(おほ)して、やさ敷(しづ)くて、
剛(ごう)勇(ゆう)くなつておくれよ」とこゝろ聞(き)こ譯(わけ)もあらず悲(かな)しなつて、すい
り泣(な)しながら、また何(なん)氣(き)さく、「ア、其(その)墓(はか)に埋(う)めてゐる人(ひと)は、服(ふく)
まの襟(えり)にしろいお方(かた)？」といふと、さも見(み)下(くだ)果(は)たといふ様(よう)子(こ)
を口(くち)元(もと)にあらわして、僕(わ)の手(て)を思(おも)ひ入(い)れ握(にぎ)む、どふして、
お死(し)になされたわたしに申(まを)した愛(あい)お方(かた)の側(かたわら)へ、從(したが)う様(よう)子(こ)
を並(なら)べたら、まるで下(くだ)郎(らう)を以(もつ)て行(い)った様(よう)子(こ)だろ」と、仰(う)つて
また鳥(とり)渡(わたり)口(くち)を結(むす)び、力(ちから)のなさうを歎(なげ)かすなすつて、僕(わ)のあ
たまを撫(なで)ながら、「坊(ぼく)もどふぞあの通(とほ)りな立(た)派(は)な生(なま)けを送(おく)つ
て、命(いのち)を終(は)る時(とき)もあの様(よう)子(こ)に似(に)ていさよくおくれはなりません、
眞(ま)の名(な)譽(え)と云(い)ふのは、神(かみ)を信(しん)じて、世(よ)の中(なか)に働(はたら)くとにあるの
で、眞(ま)の安(あん)全(ぜん)も満(まん)足(そく)も此(こ)外(がい)に得(え)られるものでない、つねづ
ね仰(う)つたことを、御(ご)遺(い)言(ごん)として、記(し)憶(えき)であいて」と、心(こゝろ)を一杯(いっぱい)
籠(かご)めて仰(う)つたのを、譯(わけ)はよく分(わ)らぬが、忘(わす)れる處(ところ)か、今(いま)

第八拾金銀附録

家庭雜誌

(四)

- 第8巻内容
- 黒猫(ポエム作、饗庭篁村訳 読売新聞明治20・11)
 - 緑葉の歎(ドーデー作、森陽外・三木竹二訳 同明治22・2)
 - 玉を懷て罪あり(ホフマン作、同訳 同明治22・3)
 - 酒鬼(ゾラ作、内田魯庵訳 女学雑誌明治22・5)
 - 妹背貝(巖谷小波作 吉岡書店明治22・8)
 - 洪水(ハート作、森陽外訳 しがらみ草紙明治22)
 - 忘れ形見(プロクター作、若松賤子訳 女学雑誌明治23・1)
 - 行路難・上(ディケンズ作、須藤南翠訳 春陽堂明治23・4)
 - 黒頭巾(ディケンズ作、内田魯庵訳 国民之友明治24・9)
 - 極樂園(アンデルセン作、巖谷小波訳 幼年雑誌明治25・3)
 - 大洪水(ゾラ作、松居松葉訳 国民新聞明治25)
 - 牢歸り(ディケンズ作、森田思軒訳 家庭雑誌明治29・8)

斯(しか)うして五(ご)六(ろく)年(ねん)を過(すご)した其(その)子(こ)は強(きやう)壯(さう)な立(た)派(は)な一(ひと)人(ひとり)まへの若(わか)者(もの)になつたが、さて斯(しか)うして子
どもの身(み)軀(からだ)を大(おほ)きくし、四(よ)肢(し)を伸(のび)ばした歳(とし)月(げつ)は、亦(また)其(その)母(はは)の腰(こし)をかいめ、足(あし)もどをわろくし
た、斯(しか)うなつた時(とき)にこそ、其(その)子(こ)が母(はは)のそばに居(ゐ)て介(かい)抱(は)もすれば、慰(なぐさ)めもすべき筈(はず)であるのだ
が、其(その)子(こ)はモウ母(はは)のそばに居(ゐ)ない、母(はは)は相(あ)かはらず寺(でう)に參(まゐ)詣(まが)して同(どう)じ坐(ざ)席(せき)にすわつてをる、
が、其(その)隣(とな)の一(ひと)席(せき)は空(から)てをる、聖(せい)書(しょ)は初(はつ)めの通(とほ)り下(くだ)座(ざ)に其(その)前(まへ)に置(お)いてあつて例(れい)の通(とほ)り讀(よ)むべ
き處(ところ)が折(を)つて、目(め)を注(つ)ぎしはしてあるが、母(はは)と一(いっ)緒(しょ)に之(これ)を聞(き)けて讀(よ)む人(ひと)は居(ゐ)ない、聖(せい)書(しょ)の紙(か)
は、涙(なみだ)が染(し)みこみこみして、文字(もじ)も臆(おそ)ろろになつてをる、同(どう)じ參(まゐ)詣(まが)の近(き)處(ところ)の人(ひと)は皆(みな)老(らう)婦(ふ)人(にん)をいた
いたしう思(おも)ふから親(おや)切(き)に物(もの)を言(こと)ひかける、然(しか)し此(こ)方(かた)は一向(いっこう)すまぬ顔(かほ)つきで、成(な)るたけ皆(みな)の
挨拶(あいさつ)を避(さ)けるやうに、する此(こ)頃(ころ)はモウ榆(えだ)樹(じゅ)の下(した)を徘徊(はいかい)するとも無(な)い、モウ樂(たのしみ)しさうな嬉(うれ)し
れしさうな顔(かほ)を見(み)せるとも無(な)い、いつでもあぢきない風(ふう)で、面(おもて)を隠(かく)すやうにボンツツトを
引き下(くだ)げて足(あし)ばやに歸(かへ)つてゆくのが常(じょう)である。

(牢歸り) ディケンズ作 森田思軒訳 明治29年8月10日

(忘れ形見) プロクター作 若松賤子訳 明治23年1月1日

第12巻 近代日本語形成資料 刊本の部 明治期③

●第12巻内容

ことばの写真法・一名筆記学階梯（丸山平次郎 森

平兵衛 明治18・11）

日本文体文字新論（矢野文雄 報知社 明治19・3）

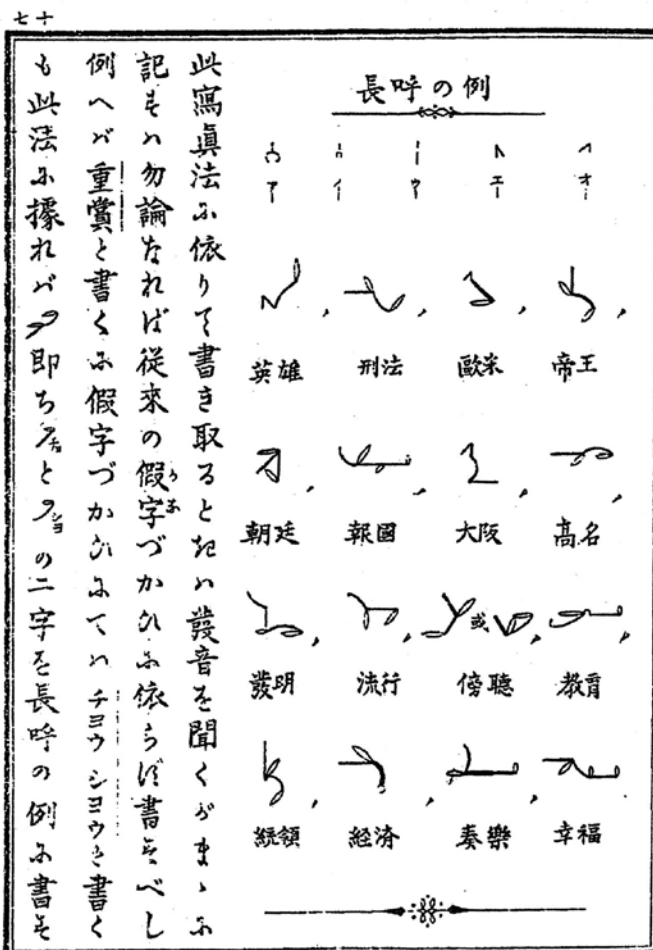
日本新字発明（小島一騰 九春社 明治20・4）

日本普通文如何（新保磐次 金港堂 明治20・6）

日本読本（新保磐次 金港堂 明治20・12）

本〈資料集成〉の
“射程”は
広大無辺！

（ことばの写真法・一名筆記学階梯 丸山平次郎）



- 言文一致・文体・文語・口語・文章・漢文・候文・写生文・韻文・古文・叙事・表現・語調・リズム・語彙・文脈・語順・会話・敬語・冗長・簡潔・漢語・和語・片仮名・ローマ字・外来語・文法・主語・品詞・語尾・文末・表記・文字・漢字・国字・仮名遣い・音韻・修辭・論理・記号・外国語・世界語（エスペラント）
- 文学・小説・戯曲・演劇・古典・詩歌・漢詩・作文
- 新聞・雑誌・辞書・教科書・報道・出版・演説・弁論・議論・速記・国語（言語）政策・国家・国民
- 歴史・思想・哲学・教育・心理学・比較文化

（日本文体文字新論 矢野文雄）

（日本普通文如何 新保磐次）

余ハ（一）以下ノ事項ヲ逐次ニ講ズルニ先ダテ世ノ學者ニ一言ヲ呈シタキコトアリ。今ヤ漢字放逐ニ急ナルノ故力、學者ハ力ヲ文字上ニ專ニシテ、文體上ニハ甚簡儉セルガ如シ、然ノミナラズ毫モ文體ニ意ヲ用ヒザルモノアリ、コレ余ガ遺憾トスル所ナリ。ヨシヤ文字ノ改良意ノ如クナルモ、文體ノ進歩依然トシテ舊ノ如クナラバ、日本普通文ハ唯讀ミ、易ク解シ、難キノ文タランノミ。偶辯論ノ文體ニ及ブアルモ、或ハ文字ニ精シクシテ文體ニ粗ク、或ハ文體ノ摘發ニ長ジテ改良ノ方案ニ短ク、ミヅカラ一ニ行ノ文ヲ造リ、或ハ能文者ヲ指名シテコレニ倣ヘト云フニ過ギズ。抑手本ナル者ハ方法ノ例トシテハ甚有力ナル者ナレドモ、コレヲ單獨ニ用フル時ハ大ニ進歩ヲ妨グルノ道具ナリ。モシ家屋

五

体ニテ書キシモノアリ又繪本草双紙ト名クル類モアリ（但シ假名ニテ書クモ皆文語体ニテ談話ノ常語体ニハアラスト知ルヘシ）斯ク古代ヨリ是ノ体アリシト雖モ未タ廣ク行ハル、フチ得ザリシナリ今其ノ例ヲ左ニ掲ク

假名体

ミダノ、ツルギノ、トナミヤマ、クモザハナカス、ミコシザノ、クニノユクスエ、サト、ヘバ、イト、ミヤコハ、トウザカル、サカイガハニモ、ツキニケリ（謠ノ山姥ノ假名文ナリ）

漢字ハ學ヒ難ク假名ハ學ヒ易キニモ拘ハラス今日ニ於テ右ノ假名体ノ行ハレ難キハ何故ンヤ是レ他ナシ常ニ兩文體ノ便利ニ壓セラル、ガ故ナリ抑モ兩文體ナル者ハ實ニ意外非常ナル便利ヲ世人ニ與ヘシ者ニテ就中其ノ功ノ今日ニ大ナルハ振リ假名新聞ニ及フ者ナシ是等ノ諸新聞ハ日々ニ幾十萬枚ヲ發兌シテ廣ク世ニ行ハレシムルハ世人

言文一致

豊後 物集高見 著

文章ハ、話しのやうな書かねばならぬ。日け文章ハ、もろしきを書いたりのと、いふことハ、誰れでもよく、知つてゐること。其ちがひめと、いふ所ハ、口から出すのと、筆から出すのとの、ちがひである。然る時ハ、筆から出し、話を讀みあぐれむ、ぢきよ、口の話しとならぬあらぬ、道理であれども、日本の人のハ、筆から出すのと、口から

●第13巻内容(抄)

言文一致(物集高見平尾錦蔵明治19・3)

言文一致(研究会吉岡書店明治34・10)

言文一致論集(言文一致会明治35・5)

開会の趣旨(坪井正五郎)／言文一致に就いて(菊池大麓)／言と文(坪井正五郎)／言文一致に就いて(井上哲次郎)／言文一致に就いて(加藤弘之)／言文一致の賛成に就いて(新渡戸稲造)／言文一致を要する歴史的原因(白鳥庫吉)／衛生上国体上から言文一致の必要を論ず(井上豊太郎)／百年の大計(岡部精一)／経済上より言文一致を観察す(前島密)／日本支那同文国ならず(大槻文彦)

言文一致論集

開会の趣旨

明治三十四年一月廿六日言文一致会演説會席上に於て

理學博士 坪井正五郎

私は言文一致會員の坪井正五郎でございますが、自分の意見を述べる前に、開會に先つて、どうして此の會を開くことになつたかと云ふことについて、一言します。

言文一致と云ふ名稱は、色々に解釋が出来るでありますが、詰り、我々が今日話をして居る言葉を、其儘に寫して、文章と同じ用をさせるのである。言は言、文は文と別になつて居るのは、知識の進歩の上に妨になるから、それ等の爲に時を費さず、又頭を苦めぬやうに仕やうとするのである。言文一致と云ふ事は、近頃發明をしたと云ふのでは萬々ない。我々が會を起しましたのは、是までも色々やつて居る人があるが、同志が寄り合つて、尙一層此事を盛にし、益々文を言葉に近寄らしめるやうにしたい。言文一致の書き方についても、大いに研究しなければならぬが、自分等も實行し、又言文

言文一致論集

一

言文一致論集

一五〇

日本支那同文國ならず

文學博士 大槻 文彦

漢字不可廢論を唱へる人が、種々に漢字の機能を述べる中に、和漢同文であるのが利益である、との一箇條があつて、支那のやうな大國を、隣に控へて居る日本は同文にして置くがよいと云ふ。同文といふ語は、中庸に「天下車同軌、書同文、行同倫」とあるが出所であらう。そして、同文とは、文字も、文章も、その意味も、同じといふことである。然るに、日本の通用文は、支那文とは全く違つて居るは申すまでもない。唯、用ゐて居る漢字漢語などは、同じであるが多いけれども、其の意味となつては、高尚な文章に用ゐるは別として、民間に、朝夕通用して居る所では、十の六七までは、丸で意味がちがつて居て、支那人には、少しも分らぬ用ゐるかばかりである。元々、漢字漢語から出たのではあるけれども、種々な事情から、非常に變つて來たのである。しかしながら、かやうに日本風に變へて用ゐるのが、全く都合であるとは言はれぬ、これで通用して、用を辨じて居る、これを誤として廢してもしたならば、日用は全く差支へる、その千萬の内、支那人には、ネツカラ、サツバリ分らぬものを、いさゝか舉げて見やうならば、

言文一致會の會誌

(明治三十四年十二月とへ)

『言文一致會』の起つたのは昨明治三十三年の十二月頃であつて、此の會を首唱した人々が帝國教育會の一室で始めて會合を開いたのは同年三月の三日であつた。それから大抵毎月一回づゝ帝國教育會内で例會を開いて今日まで引續いて居る。併し同會がよく會務を整理して全國一般に言文一致の輿論を喚起したのは本年一月の第一回公開演説會及び第一回總集會を開いてから後のことである。それで、この會の會誌は本年一月からの筆を起すのが適當であらうと思ふ。けれどもこの以前にも種々の大切な決議もあつたから、記事の順序として之を書いてかかう。

第一 往復文には「候」の字を用ゐぬこと 但し假名遣は人々の自由にする。 (三月廿五日の例會で)

第二 この會の方針を次の通りきめたこと(五月十五日の例會で)

言文一致を研究すること。

一 六づかしい文章を言文一致体に書き直すこと。

二 新聞雜誌著書などに出て居る言文一致体の文章を批評すること。

三 名家を招いて言文一致に關する苦心談をさくこと。

(言文一致論集 附・言文一致會の會誌)

第14巻 近代日本語形成資料の部①

計90件収録

●第14巻内容(抄)

洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論(西周明六雜誌明治7・3)

西先生ノ改文字論ヲ再三熟読スル(西村茂樹同)

平仮名ノ説(清水卯三郎同明治7・5)

府県布告(読売新聞明治7・11)

文論(社説)(東京日日新聞明治8・8)

日本文ヲ制定スル方法(渡辺修次郎東京曙新聞明治8・9)

書語口語同ジキヲ欲スルノ説(和田文同人社文学雑誌明治9・12)

日本文典編輯総論(大槻文彦朝野新聞明治10)

文章論(福地源一郎東京日日新聞明治14・5)

羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説(矢田部良吉東洋学芸雑誌明治15・4)

日本普通ノ文ハ仮字ニテ日常說話ノ儘ニ書下スベシ(斯クスルトキハ日本人ニ広ナル益アルコトヲ論ズ(文福齋時事新報明治15・6)

文章ノ格法ヲ論ズ(鹿鳴外史小学雜誌明治17)

文章論(西村茂樹東京学士会院雜誌明治17・4)

怪談牡丹燈籠序(若林珪蔵牡丹燈籠明治17・7)

文章論ヲ讀ム(神田孝平東京学士会院雜誌明治17・10)

日本開化の性質漸ク改めるべからず(田口卯吉東京經濟雜誌明治17・11)

東京語の通用(朝寝坊自由燈明治18・6)

意匠論(音曲の部 文学の部、工業の部、風俗の部)(田口卯吉東京經濟雜誌明治18・8)

小説文体一言(坂崎紫蘭自由燈明治18・9)

文章の改良(社説)(明治日報明治18・11)

齊武士経国美談後編自序(矢野文雄経国美談明治19・2)

速記法ノコトヲ記ス(若林珪蔵経国美談明治19)

日本の言語文章(杉浦重剛読売新聞明治20・1)

日本第二ノ日本語ヲ作ルベシ(肥塚龍学海之指針明治20・8)

駁言文一致論(辰巳小次郎同同)

新撰点標用例(渡辺修二郎訳西洋女範明治20)

和文ヲ論ズ(萩野由之東洋学芸雑誌明治20・12)

国語ノ本体並ニ其価値(関根正直東洋学芸雑誌明治21・1)

男女ノ文体ヲ一ニスル法(正統)(中川小十郎・正木政吉大日本教育会雑誌明治21・3)

言文一致(吉川ひで読売新聞明治22・3)

言文一致といふことに就て(星の家てる子読売新聞明治22・3)

明治今日の文章(中野秋香文章会第一集明治22)

日本文章会規約の緒言・日本文章会規約(同)

文章論(児島献吉文明治22・3)

偏癖文章論者(花竹堂同同)

今の小説界文派(M・M同明治22・12)

言文論(森鷗外しがらみ草紙明治23・4)

今年初半文学界(小説界の)風潮(坪内逍遙読売新聞明治23・8)

文則発行の主旨(文則明治23・10)

言文一致は昔からある(五々生女学雑誌明治23)

文体の一致を論ず(大和田建樹国会明治24・9)

文体の紛乱(坪内逍遙早稲田文学明治24・10)

「小公子」を読む(森田思軒郵便報知新聞明治24・11)

翻訳すべき外国文学(坪内逍遙早稲田文学明治24・11)

訳本「罪と罰」(森田思軒国会明治24・12)

欧文直訳並に訓点(坪内逍遙早稲田文学明治24)

罪と罰(内田魯庵訳)(北村透谷女学雑誌明治25・12)

普通文論(早稲田文学明治26・5)

小説「罪と罰」(巻の二)(坪内逍遙早稲田文学明治26・6)

適堂生に謝し併せて我が翻訳に於ける経験及び一家言を述べ(内田魯庵読売新聞明治26・10)

書簡文体は匡正せざるべからず(中野秋香太陽明治27・12)

標準語に就きて(上田万年帝国文学明治28・1)

国文脈(帝国文学明治28・5)

新領土の言語(同同)

新国字論(岡倉由三郎帝国文学明治28・8)

文学論並文体論(六合雑誌明治28・6)

漢字の利害一斑(同明治28・8)

小説文体の変遷(早稲田文学明治29・10)

江戸人士と小説家(同明治30・2)

時文の句読法(同明治30・4)

言文一致につきて(雑報)(帝国文学明治30・7)

朦朧の文体(雑報)(同明治30・11)

(文章論 福地源一郎 明治14年5月23日)

東京日日新聞

文章論

今吾曹が目前ニ差掛リタル要論ノ多キヲモ播キテ此文章論ヲ作ル所以ノモノハ敢テ漢學先生ノ如ク周漢時代ノ古文ヤ唐宋時代ノ六カシヤ文章ヲ論ズルニモアラズ英吉利佛蘭西ノ文學ヲ是非セントスルニモアラズ矢張日本今日ノ文章ニ付キ日本今日ノ文學ヲ論セント欲スルノモノナリ諸君其趣意ノアル所ハ吾人ガ口ニ能ク云ヒ得ル所ノ言語ト筆ニ能ク記シ得ル所ノ文章ト相同キマデニ至リシメント望ムナリ其シヤ我邦ニ於テ言語ト文章ト相分ルハコノ久シキガ爲メニ急ニ相同シキマデニ至ラシメ得ザルニモモモ相近キニ至ラシメ得ラザルニモモ朝一夕ノ論説ヲ以テ相近キニ至ラシメ得ラザルニモモ今日ノ如ク言語ト文章トノ隔タリクシテ日ニ相違ザカルニ至ルコトナカラシメンコト望ムニ外ナキナリ文章トハ何ツヤ言語ヲ述ブルノミ言語トハ何ツヤ意思ヲ達スルノミ今吾曹が此語ヲ怪シト思フ者ハ眼ヲ開キテ看ルベシ古來文學ノ士ニシテ至ラント欲スル所ノ點ハ達

序詞

文字能く人の言語を寫すと雖も只其意義を失はせしめて之を文字に留むるのみ其活潑なる說話の片言隻語を洩さざ之を収録して文字に留むるの能はざるハ我國に言語直寫の速記法なきが爲なり予之を憂ふるを久し依て同志と共に其法を研究すると多年一の速記法を接出して屢々之を試み講習の功遂に言語を直寫して其片言隻語を誤さず其筆記を讀んで其說話を親聽するの感あつてはむるに至りしを以て議會演説講義等直寫の筆記を要する會席に聘せし之を實際に試み頗る好評を得たり依て益々此法を擴張して世を益せんを謀るに方り嘗て神史小説の豫約出

意ニ在ラザルハ莫ク而シテ其難シトスルル意ニ在ラザルハ莫キナリ然レバ文章能ク其意能ク達スルヲ得ルモノ之ヲ能文ノレシナ能ク言語ニ達シ言語能ク文章ニ達スル絶妙ノ文章ト謂フナルベシ元來吾人ノ最用シ得ラルモノハ意思ヲ第一トス此自由自由若シ喉ト舌トヲ以テ之ヲ調ヘ以テ言語幾分自由自在ナラザル所アルモノニシテ以テ文章ニ綴ルニ至ラハ一層自由自在ナラズ免ルベカラズ故ニ古人モ文ハ古ク盡サズ云ヒシニアラズヤ或ハ口ニ訥ニシテ却テ筆ヲ以テスレバ意ヲ盡ス得ルト云フハ是レハ格段ノ事ニテ噫ハ嗚人ニシテ能記シ得ルガ如キヲ以テ普通ノ文學ヲ論スハラザルナリ抑レ世ニ文章ヲ以テ浮雲月露トテ虚飾ナラハ漢學先生ノ無中ニ有テ生ズルカ虚中ニ有テ死スルガ如キモノト心得ル人モアレハ今ノニアラズ文章ハ彼我意思ノ媒介ヲ爲ス

吾邦今日の如く、學事の盛ること、古來曾て其ためしを知らず、又今日の如く文章の亂れたるも、古來更に其たぐひを見ず、おもふは學事の盛なるに却て文章の亂る、端とあり、文章の亂る、によりて、學事ますます盛なるが如き有さまを見るに、もやあらん、古今を分たず、文章の鉢は其人に依り、また其道より、おのゝ其風ありて趣を異にするものかれども、全鉢より之を論すれば、古今の文は流暢にして品格あり、雅馴として難駁あらす、然るに今世の文の之を反し、其弊殊に難駁に歸するが如し、畢竟難駁なるをもて流暢ならす雅馴からず、また隨て品格をも失ふ、もやあらん、これ古代の文の概ね老練家の筆に成り、今世の文の多く書生の手

(明治22年3月30日)

帝國文學

標準語に就きて

上田 萬年

予の茲にいふ標準語とは、英語の「スタンダード」、獨乙語の「グマインスプラー」の事にしても、一國內に話され居る言語中にて、殊に一地方一部分の人々にのみ限り用ゐらるゝ、所謂方言なる者とは事かはり、全國内到處に於ての場處に通じて、大抵の人々に理解せらるべき効力を有するものを云ふ、猶一層簡單にいへば標準語とは一國內に模範として用ゐらるゝ言語をいふ。

しかれども、言語は何人も知ること、實に上には決して一致しがたき者なれば、此上に一標準を規定すると云へば、畢竟抽象的に其理想を談すること、思はざるべからず、而して此事はかの複雑極まる法律的生活の萬般の顯象を規定する法典編纂の事業と均しゆくべきも

(明治28年1月10日)

新國字論(承前)

岡倉由三郎

本邦の假字の文字としての資格は如何これ余が先づ論ぜんと欲する所なり、假字には誰も知る如く、片假名平假名の二種あり、前者は其字跡一定したりと雖も後者に至りては然らず、あ、い、う、の如く種々に書き表さる、然れども其中自ら重立ちて用ゐらるゝ字跡の定まりたるものなきに非ず、故に今此二者を扱ふに字跡一定の點に於て同様待遇を以てせんとす。

假字を檢するに、曩に漢字を調べし折用あつる、文字の重要な資格八ヶ條を以てするに即ち左の結果を得、

- (一) 字畫少數なるべき事 (合格)
- (二) 筆記し易かるべき事 (合格)
- (三) 字跡の明瞭なるべき事 (合格)
- (四) 字數の僅少なるべき事 (不合格)

言文論

森林太郎

あがらみ草紙 第七號

古は言と文との差別なく文字成りて言を寫し、いだし、もこれを讀ませむためにあらず、これを忘れざらしめむためなりけむ我邦をのみ、言靈の幸ふ國なりといはむは、標なる謠論ありども覺えず、「イリヤス」「オドユツセエ」の詩は猶、言のまゝなり、ヘロドントが叙事も亦猶、言のまゝなり、ホラチウスに至りては既に好みて重疊せる句を作り人に讀ませむとを旨とし、スキデラスも亦既に讀む人をして句ごとに尋思せしめむとしたりたる迹、明に見ゆ、プラトオが哲學は猶、言のまゝ、あるが多きにアリストテレスは早や言ならぬ文を作りたりき、かくて讀ませむために作れる文漸く盛になりてゆく

程に言と文との懸隔、生じて言は必ず、文に先だちて進み、文は其後より追ひ行く、如きまどなれるは萬國の史、乘に照らして見るとを得べし、
古歌の歌ふべからずなりて今様、起り今様も亦、歌ふべからずありて都々一の起れるさまを考へ見よ、
那詩の沿革に比ぶれば殆、符節を合はすが如く、中井積善は嘗て詩を論じて云はく、
「葦唐創今體。自沈宋、李杜、王岑、錢劉、元長句短章。朝野競傳。被之歌絃。如高適、王之渾。共飲旗亭。潛聽名妓奏樂。皆係其作。益每一篇出。樂工以賂求取。供奉天子。當時盛。可想見已。故四聲排比之法。與天下共之爲然。歷五季至宋。俗尚變異。而詩餘盛行。

文學界

◎江戸人士と小説家 近來、都下三四の新聞雜誌に、東京産れの人士をもて、小説家に尤も適する資質を有するものとするの説見えたり、今各家が云ふ所を抄出して、聊か吾人が所感を附し、此の問題攻究の階梯となす必ずしも徒勞ならじ、「日刊世界之日本」初號に旭川生が「歳の繰り言」の一節に、現時の小説家中、

東京育ち(正しくは東京産れ)の人々は、探菊、香雪、得知、薫村、露伴、紅葉、美妙、嵯峨の舎、不知庵、眉山、澁等にして、他は皆地方出身なり、之を他の事業にて成功せしと論ぜり、云ふどころ一側の眞理を道破せるものあり、上田氏が主に觀察力の方面より云へるに對し、文章の側、特に對問の點に於て、此の

第15巻 近代日本語形成資料の部② 新聞雑誌

計104件収録

●第15巻内容(抄)

- 小説文体と新派作家(早稲田文学 明治31・2)
- 小説の諸文体の得失(大町桂月 文芸倶楽部 明治31・4)
- 雅俗折衷体(佐藤迷羊 早稲田文学 明治31・5)
- 小説の文体に就て(島村抱月 読売新聞 明治31)
- 言文の接近に就いて(後藤宙外 大阪毎日新聞 明治34・3)
- 支那人の言文一致(読売新聞 明治34・6)
- 地方官及視学官會議と言文一致(菊池文相に望む(同明治34・7)
- 文学の戦国時代(中江兆民 一年有半 明治34・9)
- 言文一致(福地源一郎 日出新聞 明治34・10)
- 言文一致の現在及招来(鴨脚克己 教育時論 明治34・11)
- 言文一致の実行に就て(報知新聞 明治35・4)
- 新国字を紹介す(自由仮名の創案(同明治35・11)
- 言文一致の不可能(物集高見 読売新聞 明治35)
- 国定教科書問題と文体統一論と(堀江秀雄 国文学 明治36・3)
- 言文一致に関する余の経験(巖谷小波 新公論 明治37・5)
- 官府文と国語問題(山田信次 国文学 明治38・12)
- 日本語の世界的地位(堀江秀雄 同同)
- 言文一致につきて(文章世界 明治39・5)
- 理想的言語を作れ語れ(幸田露伴) / 言文一致の二大欠点(白鳥庫吉) / 漢文の羈絆を脱せよ(芳賀矢一) / 言文一致は果して冗長か(上田万年) / 先づ言語を改良せよ(徳富蘇峰) / 談何ぞ容易ならむや(大槻文彦) / 如何にせば完全となるか(下田歌子) / 言文一致の二流派(島崎藤村)
- 実用的文章について(桑木巖翼 文章世界 明治39)
- 文章の極致(大町桂月 同同)
- 国文に及ぼせる英語の感化(磯部弥一郎 同明治39・10)
- 羅馬字論所感(金子保野 中学世界 明治40・1)
- 国運の推移と文章の将来(白鳥庫吉 文章世界 明治40・1)
- 交友社会と文章(竹越三又 同同)
- 明治の翻訳家(春汀散士 同同)
- 言と文(鎌田栄吉 文章世界 明治40・2)
- 局外より見たる文章(前島密 同同)
- 文章上より見たる中村敬宇先生(増田藤乃助 同)
- 写生と写生文(文章世界 明治40・3)
- 写生文の由来とその意義(高浜虚子) / 写生と論文(柳田国男) / 写生文の妙趣(長谷川天溪) / 写生雑感(島崎藤村) / 写生の方法とその価値(黒田清輝)

ほととぎす派の文人(XYZ 文章世界 明治40)

過去廿年間の文章の変遷(同同 明治40・6)

論文の文章(金子筑水 同明治40・7)

歴史小説の文章(塚原洪祐 同明治40・10)

言語と文章(藤岡勝二 同明治40・10)

今の紀行文家・合評(天弦・葉舟・孤雁・木城 同明治40・11)

写生文界の転化(高浜虚子 同明治40・12)

予が文章上の経歴(小栗風葉 同明治41・1)

小説の文章の新味(片山天弦 同同)

翻訳の苦心(幸徳秋水 同明治41・3)

言文一致以外の文章を学ぶ要ありや(明治41・11)

言文一致は低趣味だ(井上哲次郎) / 読む必要はある(巖谷小波) / 必要がないと断言する(上田万年) / 必要があると思ふ(芳賀矢一) / 古来の名文は皆言文一致だ(山路愛山)

写生文派が先覚者(高浜虚子 文章世界 明治41)

文体について(文章世界 明治42・1)

型を破ること(小杉天外) / 囚はれざる文体(島村抱月) / 文章と型(田山花袋) / わが文体の回顧(大町桂月)

予が翻訳の態度(文章世界 明治42・10)

『即興詩人』時代と現時の翻訳(森鴎外) / 言文の印象と訳文の趣致(内田魯庵) / 語学の精確と原作の味ひ(戸川秋骨) / 補助知識の必要(昇曙夢) / 訳文独特の味ひ(草野柴二) / 語学本位と気分本位(相馬御風) / 忠実にして而して自由なる翻訳(千葉掬香)

翻訳から受けた感化(文章世界 明治43・8)

翻訳文と文章の進歩発展(内田魯庵) / 翻訳文から私の受けた利益(小山内薫) / 翻訳物と私の文章(森田草平) / 大家の翻訳よりは若い人の翻訳(徳田秋声)

新文章論(島村抱月 文章世界 明治44・4)

吾人は如何なる文章を学ぶ可きか(五十嵐力同)

真に文章を学ばんとする者に(内田魯庵 同明治44・7)

新発想論(岩野泡鳴 同同)

文章教育の必要(内海月枝 同明治44・8)

文章より見たる現代の小説(田山花袋 同明治44)

現今の国字問題に就て(井上哲次郎 東亜之光 大正1・8)

小学校の文章(沢柳政太郎 大正3・9)

小説の文脈に就て

島村抱月



文壇の今日此の頃、小説文脈と如何にせべきと云ふ人無問題に、到る所に論せらるゝ、雅俗折衷論か、言文一致論か、此の論固より今日に始まりしにあらねど、其の近時に至りて再燃せし由ゆへ主として言文一致の流行にあり、夫の新作家勃興の聲と共に、是等の作家多し言文一致の聲に響くものなりしため、一つに此の文脈の底を見透かされ、一つに此の文脈流行の弊を生じ、こゝに一種の反動が生じて、雅俗折衷に謳歌するもの漸く多く、甲賀し乙駁して意外の人氣問題となりて此の問題に關し、天外、宙外、鏡花三子の設

語学本位と気分本位

相馬御風

30

(明治42年10月15日)

是が自分の翻譯である、と言ふやうな堅い自信があつて、進んで世間へ出すやうなものを書いたものないし、殊に翻譯その物に對する纏つた定見を有つてゐない上、中途半端な考へに難多な疑問が絡み着いてゐるのではと言つて自ら保持してゐるやうな態度もない。が唯翻譯をやると言ふとが私に取つて最も興味の深い仕事であるだけは事實だ。私が翻譯をして公表するには、その原作を傳へて吾が文藝界に影響を與へやうとか、精神界を覺醒しやうとか言ふ、そんな大それた野心はさら／＼ない。寧ろ自分が興味に驅られ面白と思つて着手した仕事を、半ばは當座の生活の手段に世間へ差出したのに外ならない。餘人は知らず、翻譯をしてゐる間私の感興が刺激される。と言ふよりも自分の心の亂れを醫してくれるに適當いの仕事は翻譯である。一體私には道樂と言ふやうなものが餘りないので

(明治31年5月9日)

國定教科書問題と文體統一論と

堀江秀雄

機會といふものは實に不思議なものである。教育社會に忌はしい空氣が籠もつて居るとは、かねて世間一般に噂して居た事であつたが、思ひがけない事柄が種となつて、いはゆる教科書事件の芽をはやし、昨日までは一廉の紳士として世の好遇を受けて居た人々が今日には痛ましい獄中に呻吟するといふ花を咲かせたがために、全國の教育社會に一大恐慌を起したのには、誠に悲しむべく歎くべき事であるけれども、またこれがために教育社會の一隅なりとも汚れたる空氣が洗ひ清められる機會を得たのならば、世間は之を祝はねばならぬ。而して吾等は更に之がために文體統一の機會、少くとも文體統一を促すの機會を得たのを喜ぶのであ

(明治43年8月15日)

一舉一動が、實によく現はれてゐる。自然にヒョイ／＼と書いたのではなくて、其人物を悉く吞込んで書いてゐる風がある。チエホフは長篇は不得手だと言はれてゐる。此作も結末は少し變だが、全體に涉つてやはり拙くはない。今年の正月あたりに書いた私のものは、大分彼れを學んだつもりである。

翻譯物と私の文章

森田草平

翻譯物で讀んだものは、先づ森田先生『水沫集』です。『片戀』はすつと後に讀みました。『水沫集』を初めて讀んだのは、金澤の高等學校を中途で止めて名古屋にゐた時、金澤で知合になつた友人から讀んで見ろと言はれ、それから讀み出したので、しばらくはあゝいふのでなければ、文學でないやうに思つて、自分でもそれに似せた文體でいろいろな物を書いた。『明星』に出して貰つたのは多くそれで、其頃は

教科書事件の善後策については、教育を監督して居る當局者や世の識者の熟考を煩はすべき事柄は甚多いが、今後の教科書を如何にすべきかは、その中についても最大なる問題であらう。この問題については世間に既に種々の説があつて、中にも有力なのは現行制度維持説、自由選擇説、國定説、官民競争説、官民分業説などであるが、かく説は區々に分かれて居るけれども、たゞくとも明治三十七年度より改正した教科書を採用せしめようといふ一事には誰一人も異議を唱へる者はないらしい。明々年度より改正の教科書を採用せしめる事とならば、いづれの説によるにせよ、向後一年間にわたって數多の教科書を編纂するの必要なる事は、勿論である。ほかに聞く所によれば、文部省の意見は百難を排しても國定教科書を編纂する事に決し、既に幾分か着手し初められたとの事である。文部當局者の意見は吾等の詳しく知り得べき所でないが、

(明治40年12月15日)

寫生文界の轉化

高濱虛子

明治四十年の寫生文界なる題目を置いて論ずる時には、何人も第一に從來の寫生文なるものが、小説の方に一歩々々歩を移し始めたこと云ふ批評を下すことに一致してゐる様に見える。此れは確かに最も著しい事實である。局外者から見ると寫生文が全然小説に變つた様に見えるだらうが、然し其の局に當つてゐる我等から見ると、さう豹變した様にも實際は思はれない。他の人はいざ知らず、我等二三の者の心持を云へば、矢張り從來の寫生文を作つてゐるのと、左程大して相

違はないのである。然し能く考へて見ると、兩者の間に確かに大に異つた或る點がある。其は從來の寫生文は自己の地位を成るべく冷やかな所に置き、自分は何の色もない鏡の様なつもりになつて、其の鏡に映るものを、假令取捨選擇するにしても成るべく實際らしい形を存する様に成るべく實世間で我等が見聞するものと違はぬ様に寫し取らうと云ふのが目的である。勿論、文章である以上は是非一度頭の中を潜つて來なければならぬものには決つてゐるが、其の頭の中を潜る時分に成るべく現形を損じない様、光線も屈折せざる様にその白色の儘で現す様にと云ふ事をのみ勉めて、一に自己を没却し、客觀的描寫と云ふ事を專一にして來たのである。然るに其れが本年に入つた頃から、何處となく其れでは不満足になつて來た、其れにしても世間の多くの文學に比較すると、今尙遙かに客觀的態度を持して居るには相違は無いが、然かも多少主觀に重きをなすことになつて來た。恰かも水が砂を通る様に、貝頭の中を通るのみでは無く、寒天が寒天つきの中を

文學の戰國時代

○今や我邦の文學は、殆ど戰國の時英雄割據の有様に似たる有り、漢文崩しの體有り、翻譯文體有り、言文一致體有り、侍り免りの體有り、各種雜用の體有り、惟ふに是等の諸體各短長有り、崇重典雅の體を見はし、若くは悲壯慷慨の狀を寫すには、漢文崩し最適なるを覺ふ、委曲詳密透得十二分なるを求むるは、翻譯體若くは言文一致體に如くは莫し、優

五十一

第16巻 演説・記事論説集

●第16巻内容（抄）

内地旅行（西周明六雜誌明治7・12）
想像鎖國説（杉亨二同明治8・4）
演説集誌（民間小學）（青木輔清明治11・4・12・6）

徴兵の事／文明開化の事／演説者の心得／地租減税の御旨意／身を修め家を斉へる事／古來兵制治革の論／姓名の原因を論ず／外国交際の利害論／日本に完全の歴史なき論／開化の日本魂／學問と実業と密付せざる論／男女同等にして同権にあらざる論／教育は幼稚の時に限るの説

日本傍聴筆記法のはなし（源綱紀東洋學芸雜誌明治18・3）
男尊女卑のは是非得失（加藤弘之東京學士會院雜誌明治19・12）

修辭の學を盛んにせざる可からず（高田早苗讀売新聞明治20・12）
私は造物主あることを信ず（中村正直演説美辭法明治20・12）

明治治法律學校に於て演説（箕作麟祥同）
告別の演説（植村正久女學雜誌明治21・3）
婦人の社交上に於ける勢力（徳富猪一郎同明治21・6）

天地万物皆歸吾有（加藤弘之東京學士會院雜誌明治21・8）
井上毅君演説筆記（井上毅日本文學明治21・12）

女子教育の困難（矢田部良吉女學雜誌明治22）
政治及び社會改良に於ける英米婦人の景況（植村正久同明治22・2）
國會の話（辰巳小次郎日本大家論集明治22・5）
羅馬字會二於ケル末松謙澄君ノ演説（末松謙澄文明治22・7）

學問は一なり（加藤弘之日本大家論集明治22）
公娼の害（嶋田三郎女學雜誌明治22・12）
廢娼の急務（植木枝盛同）
井生村樓の學術演説會（尾崎行雄國民新聞明治23・5）

文章ノ秘訣（福地源一郎日本大家論集明治24）
文章論（末松謙澄太陽明治30・3）
言文一致に対する意見（讀売新聞明治34・5・8）
言文一致の必要に就て（梅謙次郎）／言文一致に就て（加藤弘之）／言文一致の賛成に就て（新渡戸稲造）／言文の一致を要する歴史的原因（白鳥庫吉）／經濟より言文一致を觀察す（前島密）／衛生と國体より言文一致の必要（井上豊太郎）／言文一致の成立に就て（後藤牧太）／言文一致に就きて（井上哲次郎）／言文一致に就いて（菊池大麓）／百年の大計（岡部精一）
演説といふ事の始り（高田早苗半峰昔ばなし昭和2・10）

計63件収録

二 演説といふ事の始り

私共が豫備門へ入つて間もない頃から、演説といふ事が世間にチラホラ始まる様になつた。

日本人は、それ迄は座談はするけれども、大勢の前で立つて説を述べるといふ事は殆んどした事のない國民であつたと言つてよからう。そして此の演説なるもの、皮切りは福澤諭吉先生などが元より其の一人であり、又西村茂樹先生なども其の一人であつた。其の他當時明六社とか共存同衆とかいふ様な團體が出来て、其中には加藤弘之先生とか西村茂樹先生とかいふ西洋學の先輩も居られ、又、馬場辰猪君、小野梓君、金子堅太郎君などいふ當時のハイカラともいふべき人も多數入つて居られたので、其の人達も演説の試みをされたであらうが、私は親しく之れを聴いた事はなかつた。そして演説會堂が一番先きに出来たのは、私の記憶では三田の慶應義

（明治22年1月6日）

○女子教育の困難

植木屋が植木を作りて色々の花を咲かせますが、左様にするには必ず植物の自然の道理を差はねば、只今ナツプ氏が述べられたる如く巧みに根を取らねばならぬのです。又醫者が病を療すにも、患者が有する自然の恢復力を助けて、藥を與へ（衡を施し療治する）からの事です。植木屋も醫者も昔しは経験ばかりで藝術を施したが、今日は経験ばかりでなく試験と云ふ者をして、試験と推理とによりて技術を進歩させる様になり、植物の解剖學植物の生理學が次第に進むに従て、如何にして植物が成立つか、如何にして成長するかと云ふ事が次第に解つて來ましたから、色々の試験が出来まして、其の結果を園藝に施す事が出来ます。又人身の生理學解剖學が進むに従て、人のからだは如何にして出來るとか、如何にして病氣にあるとか云ふ事が次第に解つたから、醫術も亦園藝と同じく進みたるのであります。

言文一致に對する意見（四十五）

◎言文一致に就いて

（言文一致演説會席上に於て）

理學博士 菊池 大麓君

諸君、私の演説に此處にありまゝと通り「言文一致に就いて」といふ題でありまゝ、言文一致會で演説するに「斯ういふ題を出して置け」何と言つても差支ないものであります。（大笑）
一體私は此言文一致といふことを賛成するものであります、賛成するの、或は私に筆を執ると誠に筆が滯つて困る、口で言ふならドウやら斯うやら言へるのであります、筆を執ると滯つて手紙を一つ書くと言つても、中々チョツタ書けぬといふものでありますから、實にさういふ不自由を感じて居るのでございます、唯今の岡部君のやう

も必要なる事で、國民の道徳を進めるには女子を教育し高尚にする事が第一である、新聞や雜誌若しくは演説に述べる人が多き様にありました。然るに爾來我邦に於て婦人の占めた地位と云ふ者が、現今諸君が婦人の爲めに望む所の地位よりも遙かに低きものであつたから、婦人の教育に全く爾來の経験にのみ據る事も出さぬと云ふ有様になつて居りました。最も昔しの女子教育は殘らず悪い、徹頭徹尾宜しくないと云ふのは無いが、今日から之を觀れば、悪い所も亦不足なる所もある故に、今日女子教育に心をを用ゆる人は、全く古るき仕方へのみ據る事は出さぬから、新に筆を立てなければならん。然らば歐羅巴亞米利加の風を輸入すれば何の譯もないと云ても、其婦人の有様を研究すれば、獨逸、佛蘭西、英吉利、合衆國等々／＼に違ふ所がありますから、一概に歐米と云ふ事には往きません。且つ又我國にも、自ら固有の性質がありまゝから、何も彼も歐米の通りにする事は今日の有様でい進み出さるゝこと無いと云ふ事も、能く解かりきつたことであります。ソレ然に是れ迄の経験のうちで、探るべきといふ論探らなければならぬのであり升けれども、亦歐米の經驗をも廣く考て、其上試験もしなければならん然らば園藝

（明治34年7月14日）

津田梅子氏

(女史の意見は月川安宅氏へ宛てし英文書簡なるを以てこゝに譯文を本文と併載す)

御尋ねに基づき、國語改良の意見聊が左に申述す。元來日本の字體は複雑のものに付き、是を改良するには根本より變更を加ふべきものと感ぜられ候人々有之、私も其一人に御座候。而して此の變更は遂に漢字を捨てゝ之に代ふるに、羅馬字綴方を以てするに至るべきものと存候。併しこれは急劇には行ひ得べきとに無之、先づ漸次、音を聞て意味を解し候よりも字體を見て意味を解し候習慣を改め、文章語と談話語の懸隔を除去いたし度ものに候。此の一方法として、漢字の傍へ振假名を施すとを今後更に弘く實行いたし候は、知識一層普く擴がり、人々皆之を便と可致と存候。學校の教課書にても、學術上の著述にても、諸種の雜誌にて、の如きにても、凡ての印刷物を振假名付きと致候は、必ず知識俗ならしめ、隨つて國語改良の目的に相向ひ候始めと可相成候之によりて、文字に注意を奪はるゝとなく、一層その意味に注意べく候。何れにしても、今後二十五年乃至三十年間の教科書は漢

●第17卷内容(抄)

『國語改良異見』(自治館明治33・5)

帝國教育會(國字國語國文の改良に関する請願書)／前島密／徳富猪一郎／インブリー／坂正臣／三上參次／岡倉由三郎／アレキサンドル／ラーネット／松島剛／加部巖夫／林襄臣(言文一致會主旨)／中村秋香／田中秀穂／棚橋一郎／後藤牧太／津田梅子(戸川安宅宛英文書簡)／永井健子／南摩綱紀／浮田和民／岡本監輔／アルブレクト／朝比奈知泉(日本今後の文字と文章)／井上円了／三並良／石川倉次／杉浦重剛／平井正俊／小西信八／木村鷹太郎／ドレーパー／清水卯三郎(明治二十三年故森文相への建議、同二十八年土方宮相への建議)／上田万年(新國字論)／福地源一郎／内藤耻叟／ヘイル／岸田吟香／大槻修二／市原盛宏／矢野文雄(支那國字につきての説の大意)／大西克知(學生近視の一予防策)／西村茂樹／中島力造／下田義天類／島田三郎／塚越芳太郎／森林太郎(言文論)／那珂通世／末松謙澄(日本文章論・抄録)／藤岡勝二／原敬(教育の方針と漢字の節減)／岩村透／内田貢／三宅雄二郎／島地黙雷／田口惠／高楠順次郎／岡田正美(國字調査の方針)／頭本元貞／巖谷季雄／金子堅太郎／眞作佳吉／ロイド／内田周平／坪井正五郎／帝國教育會(國字改良仮名調査部報告)／井上哲次郎(國字改良論・國字改良の必要に就て)／帝國議會(國字國語國文の改良に関する貴族院・衆議院の意見)

◆本文 426 頁・附録 20 頁の圧巻

岸田吟香氏
私が平假名を國字にしようと思つたのは古いことである。維新前からの事である。其時分假名で書いた手紙などが今に人の手にのこつて居る。慶應年間に清國へわたつたとき、歌を聞いて清人にやつたのが、その後再度清國へいつた時、清人の持傳へて居たのがありました。
コウいふ様に久しいさきからの意見ですから、國字改良に不同意はない、しかし刑段その後の假名の會羅馬字會へ入會もしなかつた今度も別にふかくは考へても居ない。

島地黙雷氏

文字を改良すると云ふことは、至極宜しいが文字さへ改良すれば文明が進むかど云ふにソウはいかん。印度のサンスクリットは文字の母とまで云はれる世界無比の便利な文字であるが、印度の文明は御承知の通りであります。それは何んであるかと云ふに、文字は梵天の形ぢやと云ふて神聖なるものとして今日でも印度人は之を印刷にすることさへもしない文字は思想の符牒であると云ふことを忘れて拜崇して居るからである。支那人も幾分かそんな所がある。文字は我々が使用する器械であつて進まないこととは此上ふことであらう。印度の如きと云ふこと

徳富猪一郎氏

私は國語に就ては、至極の素人で、且つ過去に於ても、現在に於ても、更に未來に於ても、國語研究など、申す面倒なることは、殆んど注意すべき必要を感じぬものであります。唯言語文字と文章との關係に就て、私の思ふ所を述べ、そうしてから後、簡単に國字改良のことをお話しする積りであります。

帝國議會の意見

左は第十四議會に於ける貴族院が國字國語國文の改良に関する建議案の議事速記録なり、兩院が調査の末之を可決するに至りしは、即ち帝國議會の意見として見るべきものなり(編者)

貴族院の意見

國字國語國文の改良に関する建議

我が國文字言語文章ノ錯雜紛亂不規律不統一ナル世界其ノ比ヲ見サル所ナリ今ヤ我カ邦ハ國運ノ進歩ト共ニ百事複雜繁多ニ趨キ最智識ノ増進普及ヲ要スルノ時ニ當リテ此ノ錯雜紛亂不規律不統一ナル文字言語文章ヲ以テ世界ノ競争場裡ニ馳騁セムトス其ノ國力ノ發達人文ノ進歩ヲ阻滯スルコトコレヨリ大ナルモノ莫カルヘシ加之ナラス我カ教育ニ從事スル人々ハ皆實際ニ其學習ノ困難ヲ經驗シテ常ニ其ノ教授ノ方法ニ苦心セリ我カ學生並兒童ハ此ノ言語文字ノ學習ノ爲ニ其學校生

第18巻 現代名家文章大観

計166件収録

◆総578頁の圧巻（『日本及日本人』臨時増刊号）

●第18巻内容（抄）

『日本及日本人』（政教社 大正5・9）

言と字と文（三宅雪嶺）

文章上の挙国一致（坪内逍遙）

現時の文界は百鬼夜行（池田義象）

国家的文章の一大關点（大内青巒）

文章上の田舎者（内田魯庵）

文章とは何乎（谷本富）

看読写作（内田周平）

先づ口語体を損べ（津村秀松）

文章の骨董的趣味（高橋龍雄）

達意の文と美文（柳原義光）

問題は口語体の精鍊（西田幾多郎）

我輩は漢文育ち（江木千之）

文章局外観（桑本嚴翼）

戦争文学に就いて（桜井忠温）

ローマ字文を排す（蜷川新）

修辭よりも内容（佐田愛彦）

吾友紅葉の文章（高田早苗）

悲鳴派の多過ぎる文壇（湯原元一）

我邦将来の標準文体（保科孝一）

文章に助けられた儒教（松村介石）

論語の文章（安井小太郎）

文章は国勢に伴ふ（牧野謙次郎）

西洋文脈の口語体（佐佐木信綱）

将来の文章は口語体（片山寛）

経国の大業無用の貨幣（永田秀次郎）

文章は思想界の貨幣（神戸正雄）

名文章と苦心の痕跡（関根正直）

文章亡国の事例（岡田朝太郎）

叙事文と議論文（池田蘆洲）

人格に文材を盛れ（高木壬太郎）

文章大観（千河岸校所）

文章は娯楽にあらず（徳田秋声）

思想ありて文章あり（磯辺弥一郎）

文字と文章（小川未明）

歴史と文章（猪狩史山）

我が文章観（入沢達吉）

言文一致文一致（竹越三叉）

文体は統一を要せず（萩野由之）

文は道を貫く器（小久保喜七）

羅馬字賛成論（左近義弼）

漢文体を根拠とせよ（前田曙山）

口語体の整理を望む（三輪田元道）

文体の一長一短（夏目漱石）

利の害を償ふ羅馬字（橋本青雨）

文章は平和の武器（巖谷小波）

柳子厚の文章を愛す（田川大吉郎）

候文の廃止を望む（植松安）

自分自身の表現（長谷川如是閑）

文体はどう定まるか（木村泰賢）

勝手次第の文字を使ふ（杉村楚人冠）

時文是非（田中萃一郎）

文語と口語の近接（加藤咄堂）

新聞と文章（丸山侃堂）

靈感は名文を作さず（笹川臨風）

帝国の文章（後藤朝太郎）

万世不朽の古典文学（前田越嶺）

口語体の文章と新聞（斯波貞吉）

世界語杯は以ての外（遠藤隆吉）

人を観て文を読む（鳥居素川）

吾輩の文章観（坪野平太郎）

仮名につける符号（大村西崖）

生意の表現としての文章（高安月郊）

我国文も世界的に（長瀬鳳輔）

因習に苦む国字問題（金沢庄三郎）

日本文は長所多し（五来素川）

文体は如何に統一せらるゝ（田丸卓郎）

新聞紙論文体に統一（松井柏軒）

文章観愚答四則（巖本善治）

漢字節減論（原敬）

英語国とならん（相島勘次郎）

冗長は口語体の欠点（田中次郎）

人を動かす文章（高嶋米峯）

文章と国民的自覚（志田義秀）

先づ口語統一と純化（成瀬無極）

人格即文章（山田三良）

真剣の文章を愛す（下田次郎）

文章に苦心が要るか（坂本四方太）

経国の大業（木村鷹太郎）

文章の要は真実と平易（堺利彦）

予の慣用する作文法（白河鯉洋）

新聞記者としての文章観（平沢玉城）

将来の文章は翻訳体（安倍能成）

文体は百花爛漫たれ（石川平山）

口語体の天下乎（大島正徳）

偽らざる文章は経国の業（塚原浩柿園）

文章上の第一約束（杉浦重剛）

衰世の文治世の文乱世の文（石橋忍月）

文章は「我」の表現（久津見蔵村）

新聞紙の上から観た文章（奥村不染）

文章体の残存は恥辱（八杉貞利）

文章の弊は非論理的（尾上柴舟）

口語文語両々相戻らず（木崎好尚）

文章習得は修養問題（内海月杖）

ローマ字論者として（土岐哀果）

文章と支那国民性（稲葉君山）

独逸文章語の由来（桜井天壇）

支那時文に就て（青柳篤恒）

戦記文に就て（大倉桃郎）

往昔口語文時代あり（石橋臥波）

文章の精神姿趣（久保天随）

口語文体と型の工夫（平田禿木）

文章は柔軟性を要す（太田善男）

作文の経験と写生文（寒川鼠骨）

当然口語文法（阿部次郎）

文体も亦優勝劣敗（西田敬止）

漢文は漸次衰亡の兆（伊原青々園）

既に口語体の世の中（上司小剣）

文章は談話に準ずべし（戸川残花）

日本文章の変遷（高橋五郎）

文界も当分は自由競争（山路愛山）

世界的となれる我が文章（相馬御風）

文は人なり（畔柳都太郎）

口語体に九分の利あり（高木武）

演説口調の口語体（尺秀三郎）

品のよい口語体歟（別所梅之助）

記者当面の問題より（荒木貞雄）

新文体の中心（山中未成）

文章の地位（土井晩翠）

作文上の第一義（小西海南）

羅馬字漢字の比較研究（前田蓮山）

文章の極致（松浦正泰）

各種の文体各種の特色（三井甲之）

文体は統一せられず（伊豆凡夫）

羅馬字論は愚論妄論（小川琢治）

大文豪出でよ（木場貞長）

文章は自然を尚ぶ（長谷川誠也）

文章の能事（藤井乙男）

口と筆（江見水陸）

文章観四則（大谷繞石）

文章は料理法（佐々木邦）

新聞体より進まん（本多静六）

日本文章の墮落に候（中島端）

仮名遣ひの改正（高岡熊雄）

文は想なり（朝永三十郎）

文は氣を以て主とす（宮崎湖処子）

ローマ字は厭（船橋雄）

人情練達即文章（堀内文次郎）

文章即ち人生（戸川秋骨）

文章は唯だ達意のみ（樋口銅牛）

両文体を採る（小杉未醒）

文の要は結論と筋道（境野黄洋）

文章の統一は思想の統一（河東碧梧桐）

文章論を評す（岡田哲蔵）

文章は無駄の無い事（高村光太郎）

惹きつけらるゝ文章（島田三郎）

語る文章読む文章（鶴沢聡明）

候文に三段四段の変化（洪沢栄一）

文章の殺人活人（湯浅倉平）

余は文章を愛す（大竹多気）

青年の修養と文章（横井時敬）

熱性の文を好む（岡田正美）

文体統一が出来るなら（堀江秀雄）

耳の文章目の文章（幸田露伴）

世界語不朽運動（中村精男）

我も筆も一体（勿堂）

日本現代の文章家（鷺城学人）

新聞紙と社会（岩崎巖）

ゴリキイの文学的使命（昇曙夢）

シユテファン・ゲオルゲ（青山延敏）

明治大正文章小史（湖上人）

文人入国記（破軍星）

書画骨董と鑑識（岡田播陽）

（三宅雪嶺）

言と字と文

* 国語・言語学者、文学者、漢学者、思想家、宗教家、実業家、政治家・官僚、記者・ジャーナリスト、教育者、辞書編纂者、外国人：明治大正期の多数多彩な学者・識者による日本語・言語観を総覧できる浩瀚な論集

言 靈

とは「コトバ」に當て漢字にして、萬葉に事霊と書し、字異にして意同じく「そらみつやまのくににはすべかみのいつくしきくにコトバのさきはふくにとかたりつぎひつがひけり」とあるが如く、日本に於ける一の重要な概念を形づく、特殊の妙味を備ふると知らる。普通に「コトバ」といふは單に口を開閉して音聲を斷續するに過ぎざるが、一たび其の由りて起れる所を尋ねば、精神の奥底より出で、愈々尋ねて愈々測るべからず。多少汎神教を加味すれば「コトバ」は神の意の現はるる者なり。希臘語に據りて「ロゴス」と言ひ來れるは正さしく「言靈」に當り、プラトンは神の意の現はるる者とせり。基督教に於て舊約全書に「メムラ」といふは之と

同じく、新約には「ロゴス」を使用し、皆な「コトバ」の意味す。約翰傳第一章に「太初にコトバあり」と偕にあり、コトバは即ち神なり。このコトバに在りてあるの類、明かに之を表明す。バに重きを置き、發音にも重きを置き、動も直ちに理と爲す。眞言に「阿字觀」あり、龍「八連白蓮一肘間、炳現阿字素光色、禪智俱如來寂靜智」といひ、初め音を妙とし、次で妙とし、神祕を極むるに及びたり。今日

言語

と稱して尋常視するは、社會の狀態の複雑に加ふるに出で、若し靜かに其の基づく所を

文界も當分は自由競争

山路愛山

重箱の中を覗いて

文體の統一などについて世人は苦勞する事は無い、さりとて自然に放置しておく譯にも行かない、併し、必要な時にはどこから其れを補ふものが出て来る、大人物大思想家大文豪が出て來るまでに行けば忽ち統一される。現在の文體に満足は出来ないが猶當分自由競争の時代が續くだらう、日本人は一體に統一が好きである。統一も下手にやると不可い、文部省が假名遣ひの改正をやつた結果はどうであつたか、忽ちにして挫折してしまつたではないか。

文章は口語體であらうが何であらうが、自分の得意なもので、自分の思想を言ひ現すに最も都合のよい形式を執るものが近道だ、此の頃の學校で作文をつくらせたりする時に、思想の如何を問はず、徒らに「テニオハ」を注意するものが甚だ氣に喰はない。テニオハが一寸位間違つて居たとて、他人に於ける様に出來て居たら其れでよいではないか、要は盛らるべき内容にある。如何に完備したる城廓でも中にはまるで人が這入つて居ないか又はひよ／＼兵許りのよりも、塙がちと許り毀れて居たとて其の中に眞田幸村が居たり秀吉が居たりすれば勝つ事が出来るではないか。

耳の文章目の文章

文學博士 幸田露伴

文章はその立ち場により、考へ方が幾通りもある様である。即ち文章は自然に出來るものと云ふ人がある、兎に角文章は或る人があつて、その人自身が出て來るものであつて、持主も何も無く誰の支配を受けると云ふ事もないものと云ふものと、ひとりで出て來るの無く明かに意識を経由するものであると云ふ事を唱へると、先づ二通りの解釋がある。

藝術家側から云はせると、此の自然に與つたのであるが、文章の實用上からはさうも行かぬ、文體の統一は、此の藝術家側から言はせると三文の價値も無い事で、甚だしい妄想、カイゼルの妄想だとまで極端な批評もされる、併し乍ら、社會の實相から考へると、あまりに自然を尙ぶが爲めに全く形式を無視し、自分一人よがりの他人に一向解釋の出來ぬ變なものが出て來ると云ふ事が云へる。どちらにしても尤である、英雄主義——かりに前者を英雄主義とする——と平凡主義とはいふの世、どの社會にも兩立し得るものである。而して、意識の強い人から言はせると統一は確に便利なる

槍も突つ込み得る、文體の統一、或る文體に統一するとすれば必らず一と騒ぎある、統一論者は決して人を審判し事は出來ない、その主唱者の云ふ如く自由には出來ぬと云ふ事である、さうした感情は必ず何人にもある、文體統一の眼前には之れだけの困難はある、例をれば文章に限らず、音聲や色彩やら、お前のやる様なのでは不可ぬ、こんな聲を出せなど云ふ事は甚だ無理な事である。さうした點から一般に統一論を強要すると多く拒否される結果になるであらうと思ふ。

併し、兩方そのやうに意地張つて喧嘩腰でも困る、文章の目的として書く人見る人、兩方の考への調和は極めて必要な事である。兩方がお互に撲滅し合ふのは不可である、つまりは遠心力と求心力の關係、プラスα、マイナスαでかゝねばならぬ。文章と云ひ文體と云ひ、お互の交渉の上に立つものであるから、いつと無く、東西南北、じり／＼と自然的に摩擦し合ひ、互ひに融合し、永い／＼歲月の後は或る一つの形になり行くであらう。

將來の文章は翻譯體

文學士 安倍能成

現代の文章はまだ長く混亂の狀態で續くだらうと思ふ。併し私の考によればその統一の方向は大體已に見えて居る。第一に現代の文章は口語體即ち言文一致體には、已に殆ど統一せられて居るといつてよい位である。恐らく明治に生れた人の大多數はもう口語體以外の文章を書かなくなつたらうし、明治の末や大正に生れた今後の青年は口語體以外の文章は書き得ないであらうと思ふ。口語體の魁をなしたのは小説であつたが、その當時小説に口語體の可能を許した人も、論文殊に學術的論文に於ける口語體の可能を許す人は少なかつたであらう。然るに今は口語體でなくては、細かな思想を流動的に叙述する論文の書けないことが、殆どすべての人に感ぜられる様になつて來た。そして世に現はれる論文といふ論文は、少數の例外を除いては皆口語體になつてしまつた。——しかし私の目に觸れないもので存外非口語體の論文がまだ多くは

ないかとも思ふが——將來の文章が口語體に統一せられるだらうといふよりも、現在の文章が已に口語體に統一せられて居るといふ方が事實である。

次に口語體の中の如何なる種類かといへば、將來の文體は翻譯體であると思ふ。我國の古文がそのまゝに現代の文章となり得ないことが明白であり、且つ漢文の素養が新しい人程薄くなりつゝあると同時に、歐文の思想や感情に對する親みが次第に増し來つて、その阻隔が益々減少しつゝあるといふ事實はどうしても上の傾向を語るものである。小説が口語體の盛大を來す原動力となつた様に、翻譯體の文章の盛大を來した原因は最近五六年に於ける翻譯の流行にあることは争はれないが、併し更に深い原因は、日本に於ける西歐文化の影響が従前より深くなつて、殊に青年がその思想や感情を表現するに當つて、歐文體に可成り直接な自然な方法手段を見出す様になつたことである。併し現代の文章がそれによつて統一せられる爲には、翻譯體が不熟な所謂翻譯體に止まつてな

新聞體より進まん

文學博士 本多靜六

一、現在の新聞體の文章が主體となつて、漸次進歩すべきものと信ぜられ候。

し、波瀾起伏の必要なるを文章上に聊か應用せんと努力するものに外ならず候。

二、未だ所謂文學的文章を書きたる事なきが故に、取り分けて大なる苦心用意を爲したること無きも、自己の専門とする學術上の意見を、専門家以外の人にも容易に理解せしむるために、聊か多年苦心せしが、近頃に至り容易に理解せしむると同時に、更に讀者に感興を起さしむる様注意する事、即ち材料の案配に注意し文章の組立上に抑揚頓挫起伏等を應用する事に多少の用意を致し居候。

これは小生が諸處に於ける演壇上の経験に基くものにして、即ち單に聽衆をして容易に理解せしむるのみにては聽衆を最後迄引き止め置く事の困難なるに鑑み、更に容易に且つ面白く愉快に聽かしむる爲めに、演說組立上に巧みに材料を案排

日本文章の墮落に候

中島端

第一問は却々にむづかしく、又趣味多き事と存じ候。詳細に研究致候はい、此のみにて一單行冊子の資料十分なるべく候へば、今は極めて簡単に愚見の一斑丈左に申試み候。

文體の統一てふ事に付、發案者の御思召如何かは存せず候へども、ある意味より申さば、文體の全然統一せる先例として、今古殆ど見當り申さず候。但公用文書とか、書翰文とか申すものゝ一體文に候はい、ある時代を限りて、やゝ統一の體を成し候へども、一時代は一切文體を擧げて統一せりてふ

◆第17卷「國語改良異見」・第18卷「現代名家文章大觀」は明治期言論界の言語・國語論の総まとめと言える集成です。

資料
集成

近代日本語〈形成と翻訳〉

川戸道昭・榊原貴教 編著
(中央大学教授)

全18巻・別巻1

全巻・好評発売中!

根本を問う画期的業績!

原典〈復刻編集〉資料集

巻	書名	編	頁	ISBN	本体価格 (税別)
1	総目次+総索引		240 頁	978-4-86688-201-7	14,000 円
2	挑戦する文体・山田美妙集	文体編 (2~8巻)	520 頁	978-4-86688-202-4	26,000 円
3	懐疑する文体・二葉亭四迷集		520 頁	978-4-86688-203-1	26,000 円
4	理想の文体・嵯峨のやおむろ集		520 頁	978-4-86688-204-8	26,000 円
5	苦渋する文体・尾崎紅葉集①		570 頁	978-4-86688-205-5	28,000 円
6	苦渋する文体・尾崎紅葉集②		500 頁	978-4-86688-206-2	26,000 円
7	言文一致作品集①		630 頁	978-4-86688-207-9	30,000 円
8	言文一致作品集②		430 頁	978-4-86688-208-6	22,000 円
9	近代日本語形成資料(刊本の部)江戸期	史料編 (9~18巻)	630 頁	978-4-86688-209-3	30,000 円
10	近代日本語形成資料(刊本の部)明治期①		430 頁	978-4-86688-210-9	15,000 円
11	近代日本語形成資料(刊本の部)明治期②		630 頁	978-4-86688-211-6	25,000 円
12	近代日本語形成資料(刊本の部)明治期③		560 頁	978-4-86688-212-3	26,000 円
13	近代日本語形成資料(刊本の部)明治期④		410 頁	978-4-86688-213-0	22,000 円
14	近代日本語形成資料(新聞雑誌の部)①		520 頁	978-4-86688-214-7	26,000 円
15	近代日本語形成資料(新聞雑誌の部)②		530 頁	978-4-86688-215-4	26,000 円
16	演説・記事論説集		550 頁	978-4-86688-216-1	27,000 円
17	国語改良異見		460 頁	978-4-86688-217-8	22,000 円
18	現代名家文章大観		590 頁	978-4-86688-218-5	30,000 円
別巻	欧米文学の翻訳と近代文章語の形成		310 頁	978-4-283-01188-5	20,000 円

[全18巻・別巻1揃 467,000円(税別)]

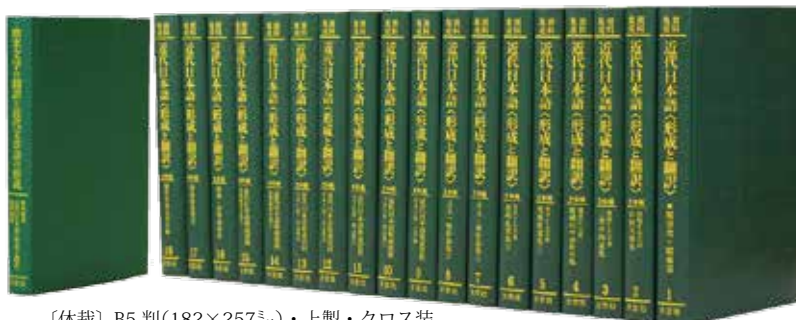
配本・刊行一覧	回	巻	刊行	ISBN	本体価格
	1	4巻(1~4巻)	2014年11月	978-4-283-01183-0	92,000円
	2	4巻(5~8巻)	2015年5月	978-4-283-01184-7	106,000円
	3	5巻(9~13巻)	2015年10月	978-4-283-01185-4	118,000円
	4	3巻(14~16巻)	2016年5月	978-4-283-01186-1	79,000円
	5	2巻(17~18巻)	2016年8月	978-4-283-01187-8	52,000円
		別巻	2014年11月	978-4-283-01188-5	20,000円

*各巻分売可

図書館に全巻を
必要な巻はお手元に!

〈共同出版〉大空社
ナダ出版センター

別巻



〔体裁〕B5判(182×257⁵/₈)・上製・クロス装

本集成を
必要とする
研究領域
テーマ

■言文一致・文体・文語・口語・文章・漢文・候文・写生文・韻文・古文・叙事・表現・語調・リズム・語彙・
文脈・語順・会話・敬語・冗長・簡潔・漢語・和語・雅俗・片仮名・ローマ字・外来語・文法・主語・品詞・
語尾・文末・表記・文字・漢字・国字・仮名遣い・音韻・修辭・論理・記号・外国語・世界語(エスペラント)
■翻訳・文学・小説・戯曲・演劇・古典・詩歌・漢詩・評論・論説・作文
■新聞・雑誌・辞書・教科書・報道・出版・印刷・演説・弁論・議論・速記・国語(言語)政策・国家・国民
■歴史・思想・哲学・教育・心理学・比較文化・社会・風俗・児童・女性

学術資料出版

大空社出版

©OZORASHASHUPPAN 2018

東京都北区中十条 4-3-2 (〒114-0032)
TEL:03-5963-4451 / FAX:03-5963-4461
www.ozorasha.co.jp / eigyo@ozorasha.co.jp

・お取扱